

# 自由と放埒の旅

九折空也

Quali, 二〇一五年七月号

快感

小さいもの

自由

爆発

魅力

熱

計画

欲望

(欲望2)

響け

体温

永遠の未来

## 快感

快感だ。

日々を生きていくのは、それだけで快感だ。

そうだと思えない人は、日々を生きていないのかもしれない。

対処はなくて、ただそういう生き方もあるのだな、としか誰にも言えない。

時間は誰にだって貴重だ。

時間の貴重さについて言い合いだす神経がわからない、というぐらい貴重だ。

時間は実在しているが、流れている、とは僕は思わない。

時間が流れているとわかるのは、結果論に過ぎないのじゃないか、後に

なって「流れていたんだな」というだけの。

時間はいつも目の前にある。本当は誰にとつても、そうして目の前にある

のだろう。

時間というのは、無限にある。

三年間があるなら、それは、無限の三年間、として実在している。

あれこれ言わなくても、目の前にあるのだから手触りでわかるだろう。

それに触れていると、いつもくる、胸を貫くような、この感じ。切なく、

あわただしく、いてもたってもいられないような。駆り立てられ、それでい

て満たされ続けているような。

だから快感だ。

このことを、わかりあっている、というようなヒマはない。

なんでもかんでも、わかりあおうとする人や、理解しあおうとする人がい

る。そういう人はたくさんいて、いつでも手ぐすねを引いて待ち構えている。

僕にはそういった人たちが、交通取り締まりをしている警官に見える。

交差点ごとに、「あーその、ちよっと止まって」と、高圧的に命じてく

るのだ。

それで、立ち止まらされて、あれこれ事情を説明させられるのだけれど、

結果的に何もなくて、「それじゃいいよ、行って」となる。

そんなもの、一つ一つの交差点で足止めされていたら、やっていられるか、

迷惑きわまりない。

そんな取り締まりが流行している世の中はどうかしている。

快感のない人が、快感のある人の足止めをしていい権利などないと思うが、

とにもかくにも高圧的に命令されることが横行しているのだから、厄介なも

のだ。

それで、何はともあれ、人間は何かをしなくてはならないのだ。

何かができる時間が、目の前にゴロンとある。

このことが、胸を貫いてきて、快感だ。快感というには、胸が苦しすぎる

ところがあるが。

最も足を引く張るものは、「癒し」かもしれない。

「癒し」とはつまり、その胸の苦しさ、胸を貫いてくるものを、弛緩剤で

麻痺させることだ。

それは確かに「癒し」かもしれないが、そんなところを癒してしまつてど

うする。

何だつてできる時間があり、何かをしなくてはならないが、何をしたらいい

かはわからない、そう簡単に定義はされない。

それでもこれに向き合っていくしかないのだ。考えこむのは、一見誠実に

見えて、実は逃げだ。

考えたつて、わかりやしないのはミエミエなのに、考えこむふりをして、

体よく逃避を決め込んでいく。

まあ誰でも、そういうときもあるのかもしれない。

「癒し」というのも、ごくわずかな、合理的に限られた時間なら、発想

の切り替えによいかもしれない。

が、だいたい、「癒し」に手を出す人は、始終「癒し」に嵌まりっぱなし

で、もう何もかもを見失っているものだ。

「癒し」にも典型的だが、この胸を貫くこの感じ、この無限の時間から目

を逸らすと、いろんなものが見えてくる。

いわゆる、迷いというやつだ。

立ち止まると、いろんなものが見えてきて、選択肢が見えてくる。この、

選択肢が見えてしまうことを「迷い」という。

そのとき見えてきた選択肢は、全部ハズレだ。

選択肢が見えてきてしまったということが、すでに敗北の確定だ。

このことは絶対に間違っていない。

正しい時間の中にいる人間にとって、選択肢を認識できるのは、選択をし

てから後のことだからだ。

正しい時間の中にいるときは、「選択する」という行為はほとんどなくて、せいぜい後になってから、「まあ違うやり方もあったんだな」ということを、ぼんやり思いつくぐらいだ。

選択肢を選ぶとき、数秒は立ち止まってしまおうだろう。

そしたら、そこからはもうどれを選んで、選択肢の全体が数秒前の過去のものなので、どれを選んだってどうせ何も間に合わない。

選択肢を選んでいての時点で、もう乗り遅れたのだ。

だから、立ち止まって選択肢が見えてきてしまうという、「迷い」の発生、この「迷い」の発生が確認されたとき、すでもう敗北してしまったのだ。

じゃあもう選択肢のことなんかほったらかしておいて、まったく別の次のことを考えるしかない。

胸を貫いてくる、この苦しさと切なさ、ときめきのものへ、正しく向き合いなおすしかない。

時間が無限にあるということ。

三年間なら三年間という、無限の時間があるということ。

これがときめきの正体だ。

ときめきを見失った人にこのことが説明で伝わらないのはどうしようもない。

老けた大人には、たとえば三年間というと、「タイムリミット」というふうに聞こえるらしい。

これはもう、老けた人間にとつてはどうしようもないことのようにだ。

だから老けた大人は、たとえば、「一年以内に彼氏を作つて、三年以内に結婚する、それができなかつた場合は五年以内に婚活で結婚するわ。それが時間的に限界ですもの」という発想をする。

それによって、自分で「焦る」。焦りをわざわざ自分で作り出している。焦るのはだめだ。これはしようもない話だが、あえて言うと、焦りという

のは一種のパニック状態で、そのパニックぶりを自分にごまかしている状態に過ぎない。

こんなパニックごまかしの状態では、力が出るわけがないし、そもそも判断力が著しく低下してしまう。必ず、全てのハズレを引くだろう。

それも一つの、生きた証かもしれないが、そんなゴタクはどうでもよく、誰もそんな哀愁を好きこのんで実感なんかしたくない。

焦った人は、パニック状態であり、実は右も左もわからなくなっている。だから立ち止まる。パニックだから、どちらに行けばよいのかわからなく

なっているのだ。

そうしたらますます選択肢が無数に見えてくる。全部ハズレだが……

もうこうなつてしまつたらだめだ。こんな人はもう、目の前に素敵な人が現れても、「素敵！」と思えなくなっている。

何もかもが、選択肢の一つにしか見えなくなっている。

選択肢ばかりが空中に浮遊していて、事実とか実物とかは存在しなくなっているのだ。

事実とか実物とかが存在しなくなっている、誰かのことを引き留めては、「わかりあおう」「理解しあおう」とする。

「最近パンケーキが流行っているわよね」「そうね」というようなことを、わかりあい、確認しあおうとするのだ。自分では事実も実物も見えなくなっているから。

もはや、自分の気持ちさえ選択肢の一つになつてしまひ、「がんばる」「やりたくない」という選択肢が入れ替わるだけ、というような状態になつている。

そうしたらやはり、

「がんばろうね」

「そうね」

「でもやりたくないね」

「そうね」

「でもがんばろうね」

「そうね」

「がんばれる気がしてきた」

「そうね」

「でもやっぱダメかも」

「そうね」

と、えんえん、気持ちをはかりあうとか理解しあうとか、わけのわからぬことを続けるしかなくなる。

僕は生まれてこの方、やる気なんて持ったことがないが、そんなものなくとも、胸を貫いてくる実物があるのだから、おのずと自分の状態なんて決まつてくる。

やる気なんかはないが、僕を支配するものがあるのだ。

それを僕は快感と呼んでいる。

快感と呼ぶには、やや胸が苦しすぎるけれども。

でも、快感といえ、これ以上の甘美な快感はないから、これを快感と呼ぶことこそ、きっと正しいのだろう。

これからどうしていくのか？

誰だつてそんなことを考えているように思える。

それを考えるのも悪くないときがあるが……

でもたいていは、その話、交差点に立つ交通取締官だ。

これからどうしていくのか、その快感をまつすぐ噛みしめ直すのは悪くないかもしれないが、これからどうしていくのかという「選択肢ごっこ」はごめん、選択肢は迷いで立ち止まりなのだから。

どうせ僕は恋をして生きていくのだろう。

恋も夢も似たようなものというか、完全に同じものには思える。

胸を貫いてきて苦しいという、同じものなのだから、どうせひとくりに「快感」と呼んでかまわない。

僕は興奮している人間が好きじゃない。

恋といつて、興奮してそれを話す人があるが、聞くたびにニセモノだなと思う。

胸を貫いてきて苦しいものを、人間がはしゃいで話せるわけがない。

胸を貫かれて、苦しく、快感にしびれている人間は、何も言わず手を横に振るだけでも、なんとなく「ああ」とわかるものだ。それだ、と、なぜかわかるものだ。

もちろん、胸を貫くこの感じに、大きな声で応えて返す、という方法もある。

それは、いわゆる「情熱」だ。

情熱は好きだ。情熱は自然なものだし、いかにも人間らしい。

問題はきつと、この快感が、苦しさを伴うことにあるのだと思う。

苦しいのだ。ものすごく苦しい。胸を直接貫かれているのだから当たり前だが、そうとはわかっていても苦しいものは苦しい。

加齢の問題は、人間は加齢につれて、この苦しきからの逃げ方を知ってしまふということではないだろうか。

人間は青春を失うのではなく、青春に耐えきれなくなるのだ。

もう若くないので、苦しきの負担に、耐えきれず、支えきれず、ギブアップしてしまい、逃避してしまうのだ。

そのひとつが、いわゆる「癒し」でもあるだろう。

胸を貫くこの苦しきには、すさまじいものがある。甘美だが、耐えきれない。

僕もいつの間にか弱くなったのか、気が付けば、かつての自分より、熱心に逃げたがっている自分を感じる。

まあでもな……

逃げるのは、本当に耐えきれなくなつてからにしようか。

苦しいのは、苦しいが、苦しいといつても、ただ苦しいだけじゃないか。

そういうえば、昔はよくそれで叫んだものだ。僕がそれで叫ぶとき、よく周りは「いいぞ」と笑つてくれた。

僕が人を笑わせる唯一の方法がそれだったかもしれない。

あのときは誰も、僕が叫ぶことを、「理解しよう」なんて思わなかったかな……

交通取締官の問題はどうすればよいか。

そんなものは決まつていて、無視すればいい。

彼らはまるで取締官のように交差点に立っているが、本当には公権力じゃない。

たとえ本当の公権力だったとしても、無視するなら無視してしまえばいい。

胸を貫かれて、貫かれたままで、毎日「いいねえ！」と叫んできた。みんなそれでよく笑つた。

胸を貫く、この快感が、苦しく突き刺さってから、「苦しい」と言って笑え。

そうでない、何に腹が立つといつて、こっちは本当に苦しんでいるんだ。こっちは本当に苦しんでいるのに、その苦しみがそのままに、同じようにいるつもりで芝居をされたら、さすがに腹が立つだろう。

人を交差点で立ち止まらせて、わかりあおうとか理解しあおうとかするのは、ひよっとして、その芝居をするための情報集めのためにそれをしているのか。

わからない、し、わかったところでどうしようもないが……  
どこかの誰かが、「Love you」を日本語訳するのに、「月がきれいですね」と当てたという。

僕にはそんなシャレっ気はないので、僕が日本語訳すると、「時間は無限だなあオラア！」と叫ぶ具合になるだろう。

「Love you」というのもつまり、胸を貫くこれの、快感と苦しさを言うのだろう。

じゃあやはり、僕もそのまま、僕の情熱として訳するしかないわけだ。

思えば、女に愛される要素が一ミリもない僕が、それでも愛してもらえることがしばしばあったのは、この「Love you」のせいかもしれない。

胸を貫く、この無限の時間、時間の無限実在。快感。同時にすさまじくある苦しさ。そこにヒロインが現れて、つい叫んでしまうこと。情熱。「いいねえ！」「いいよねえ！」。主語も目的語もない叫びだ。理解されるためのものではない叫び。せいぜい言うなら、胸を貫いてくる実物へ、負けん気と呼ぶするという、ただの僕の性格か。

何か知らないが、確実に、何人かの女の子は、僕のことを大好きでいてくれた。たぶんほとんど、僕と初めて出会って、そのときからずっと、初めから大好きでいてくれた。

そういうものじゃないか。これまではそうだったし、これからはずっとそうだろう。

無限の時間が、輝ける日々であり、快感だというのは、たとえ戦争がおっ始まってでも変わらない。

人間の差配ごときで、偉大なる快感が左右されてたまるものか。

何を快感とするか、何をどうしたら快感でなくなるか。そういった、選択肢をする権利は人間には与えられていない。

何パーセントか、早く終わりが来ねえかな、と、待望する気持ちが混ざっ

ている。それぐらい、これは苦しいのだ。最後まで耐えきってゆきたいが、最後まで逃げずに耐えきるには、自信がどうこうと、ちよっとした弱気が混ざる。早く終わりが来ねえかな、と思ってしまうのと同等程度、生まれてきてよかったと、心の底から思わされている。

こうして話しているうちに、考え方が変わってきた。

苦しいなら、ずっと苦しんでいればいいじゃないか。

元々が、そういうものなら、ジタバタしたって仕方がない。

苦しむのをやめて逃げたら、そっちはそっちで、今度は寒いだろう。寒いのもいやだ。だとすれば、結局逃げ場はないのだ。

だとしたら、せめて悔いの残らないように、最期まで快感を。最期まで

「苦しかったぜ」と言いながら、生き切るしかないのだ。

僕は永遠に恋人募集中ということにしよう。どうだ、この懐かしい看板

でも、最後まで苦しんで生きようというのは、つまりそういうことだ。誰

だって一般論として、恋とは甘く切なく苦しいもの、ということぐらいは

知っている。

僕の恋人は、僕のことを嫌いでかまわない。どうせ、僕のことを好きか嫌いか、そんなこと初めから聞いちやいない。どちらを言ってもらってもかまわない。別に僕のことを嫌いで、僕が快感に苦しめるならそのときその人は恋人だ。

誰かが僕のことを大嫌いで、無限の時間が目の前に実在するというこの快感と苦しさが胸を貫くことには変わらない。僕とあなたと、両方苦しんでいる。叫んだり、笑ったりするだろう。そんな中に、僕のが好きか嫌いかなんてどうでもいいことだ。この期に及んで、僕はいちいち自分のことになど興味はない。

目の前で、爆弾が燃え続けている。これはよろこびの爆弾だ。よろこびの爆弾が燃え続け、僕を痛めつけ続ける。だから苦しく、苦しみ続けるうちは、よろこびに満たされ続ける。快感だ。爆撃はごめんこうむりたいというのが現代かもしれない。みんなそうして弱くなってしまうたのかもしれない。

僕はどれだけ強いだろうか。かつては我ながら、無尽蔵に強かった気がするが、果たしてこのまま強くあり続けられるのか。どこまで、途切れることなく、強くあり続けられるのか。快感の中を、胸を貫かれながら。少なくとも、僕は生きていくうちは達観しないだろう。達観するのは死んでからだ。

「癒し」は好きじゃないと先に申し上げたとおり。

何をどうしたらいい。そんなことはわからない。そもそもそんなことをわ

かるために時間があるのじゃない。ほとんど灼けるためだけに生きているのだ。何かをしなくてはならなくて、時間があつて、何をどうすることもできなくて、ただただ灼かれる。永劫にそれが続く。もちろん何かをすることもあるが、それをしたからって助からない。逃げない限りは助からない。何をしたって胸は貫かれたままで、灼け続けることは変わらない。

自分が強いと信じるなら、いつか灰になるまで灼け続けることだ。落ち込むということがわからずに生きてきたけれど、僕はそもそも選択肢を知らずにきた。だから嫌われることもたくさんあったのだと、今になってようやく少しわかる。でも嫌われたからって、何の選択肢も出ないのだから……

ただ無限の時間だけが実在している。時間はつくづく無限だ。快感は苦しくて、悲惨なほど快感だ。どうせ恋をしながら生きていくのだから、女性の全ては、僕を呼び止めない限り、誰だつて僕の恋人だ。そう作られて生まれてきたことの、胸を貫くこと、この苦しさ。

「快感／了」

## 小さいもの

僕は失敗もしないし凋落もしない。失敗したらそれで終わりだと思つてい

る。傲慢なのかどうかを気にしたことはない。

そういうことを気にするのは、ずっと先か、あるいは永遠に機会はこの

いのじゃないか。そういつた価値観が、いいのか悪いのかはわからない。いいか悪いかは、全てが終わつてからわかることだろう。そんなことのために、今の時間を無駄にしたくない。

僕にはやるのがあれこれある。あれもしなくてはならないし、これもしなくてはならない。

何一つ、取りこぼしをするつもりはない。調整をするつもりもない。

調整なんてしなくても、手の届くところは届くし、届かないところは届かない。だから調整する意味はない。取りこぼしなんて、取りこぼしたものはもう僕のものではないのだから僕の目録には入らない。

あれもこれも、やらなくてはならない。今、古い女の匂いがした。

思春期の女がこぼす匂いだ。

僕と寝た女が、幸福にはならないし、不幸にもならない。寝るには寝るが、その後どうなったかを確認はしない。女の子だつて忙しいものだから、そんな野暮に時間を割かせたくない。

ただ、今、古い女の匂いがした。

すぐろく遊びだつて手づかみの青春だったあの日々の匂いだ。

誰だつて価値観を持つているのかもしれない。それはまだわかるが、価値観を設定して実験している類とは話すことはない。

価値観というのは、また違うのかもしれない。

僕は価値のあるなしで、物事のやるやらないを決めていない。

価値うんぬんは外側の人間が決めることじゃないのか。

僕が僕としてやることに値札をつけたりする理由はまったくくない。自分で生産したものを自分で買い取るのは不可能なことだ。

何かをやるのが偉いんだ、と言いたがる風潮がいつの間にかある。

僕は、別に偉くなりたくない、と言って、いつも喧嘩になってしまふ。喧嘩するとか、人間のぶつかりあいとか、そういうものにも価値が見出されているところがあるが、僕はやはり興味を持ってない。

つまり、やはり、僕は価値に基づいて動いていないのだ。何かを、やりたいからやっている、ということではできないみたいだ。ほとんど、無意味にやっているというか、憑りつかれたからやっている。憑りつかれたものならやる。

憑りつかれていないものなら、どれだけ価値があつたってやらない。小さいものを極めるのが好きだ。極めるというのは大げさだが。いついかなるときも、どうせ手がけられるのは小さいことだろう。

そして、小さいものが積みあがつてこそ、大きいものになってゆく、というふうには捉えていない。ヘンな言い方だが、小さいものが小さいとは僕は思っていない。思えないのだ。

昔、バスの中で目が合った女の子がいて、たまたま、同じバス停で降りた。バスを降りてから、最後にもう一度ちらりと、彼女は僕のことを見た。

僕はその場で、地面というか、道路の縁石にどつかと座った。遠くでどこかの文化祭の音が聞こえていた。

僕が両手を広げて無言であいさつすると、振り返った彼女は立ち止まって笑い、いそいそと歩いてきた。

僕とおしゃべりをしにきたのだ。友達の顔をしていた。それはとても小さいことだ。人生の足しにはまるでなりやしない。

だが僕は人生に足しを求めていない。お気に入りの色を塗り重ねたいとは思っている。

それがどれだけ小さい点でも、映えて好きな色なのだから、それは積み重ねておきたい。覚えておきたいわけじゃないが、その時間はその時間を過ごしたい。

覚えるというと、僕にはほとんど覚えているものがない。ずっと夢ばかりがある。そして思い出は夢の中に分類される。だからこそ思い出を貴重に感じている。

思い出を増やすことは夢を増やすことだ。夢は、いくらでも塗り重ねたい。夢がまずしいのはいやだから。

僕は豊かになりたいのではないのだ。豊かさといって、貯めこみたくない。そうではなく、使い果たしたい。何なら他人の分まで使い果たしたい。

今日という一日には可能性が詰まっている。それを、使い果たしていつ、

今日という一日のリソースを、すっからかんにしてしまいたい。

もう一度、今日という日を、たとえ神様が搾ったとしても、もう一滴も出ないぞ、というぐらい使い果たしたい。

今日をみっちり貯めこんで、明日のために、という発想はない。持ってきたものを今日に全て使い果たしたい。何かを得て帰るとか、持つて帰るとかいうのはまっぴらごめん。

小さいもの……たとえば、ダーツボードの高得点は、的が小さくなっているだろう。

そこに、正確に矢を刺せるか、ということがダーツゲームであつて、これはわかる。

もし、ダーツボードが馬鹿デカくて、「こんなもの誰が投げたってブルに入るだろ」というようでは、ダーツゲームはバカバカしくて成り立たない。

僕は、「大きい目標」と聞くと、大きいダーツボードを想起して、バカバカしく感じるのだ。

「目標」は、小さいからこそ目標じゃないのか。大きすぎる目標なら、いちいち見なくてもいいじゃないか。大きすぎて見えつばなしなら、目の標はいちいち要らない。

大きい目標というと、「僕はグランドキャニオンになります」というような、わけのわからないことを言うのかな、という気がしてしまう。たとえば総理大臣になることを目標にするにしても、別に総理大臣が巨大だというふうには僕には感じられない。それが「大きい」という印象に映るのは、単なる意識やイメージの肥大じゃないのか。

僕には小さいもののほうが確かなものに思える。かといって、小さいものをわざわざ愛するというような悪趣味でもない。

単に、僕自身が小さいのかもしれない。

僕自身が、ずっと小さくあつて、ずっと動かされつばなしでありたいという気持ちはある。

そう、小さくあり続けたいというのは、ずっと尖がっていたい、ということでもある。大きかったら、それは尖っているとは言えないから。

ただし、尖っているのが、カッコイイと思っっているわけじゃないよ、念のため。

小さいものというのは、たぶん数学で言うところの、微分のようなものに引きあつていると思う。

微分したら、当然、次元が変わる。次元が変われば単位も変わる。

人生の足しになるとか、覚えていることとか、そういったものを微分すると、元あった単位は崩壊し、夢とか思い出とかの単位系になる。

たぶんそういうことなのだろうが、これは余計にわかりづらくなっただろうか。

まあでも、これはしよせん、僕がやることの性質だ。

人間が生きているのを、大きく捉えようと、これはまったくバカらしくなるし、僕にはそもそもどうしてもそういった捉え方ができない。

つまり、人間なんて、出生、就学、就労、納税、結婚、繁殖、死去、納骨、という8工程を経るだけの存在でしかない。

この8工程の出来栄えにキリキリすることが、生きることなんだとは到底思えないし、僕にはどうしても、そういった単位でキリキリする感覚が得られない。

微分しているのだから、単位系が違って、感覚が得られないのは当たり前だけれど。

「大きい」単位で、こうして人間の生を眺めることには、僕は縁がない。僕の場合、心は器ではなく針だ。レコードプレーヤーの針みたいなものだ。小さいものを捉える針。もちろんツルツルで寂しいレコード盤をなぞるのは寂しいから、すばらしいものが無限に詰め込まれたレコード盤をなぞりたい。レコード盤の溝に刻まれうるすべてのものを使い切るのだ。

まあ、そんなことを言いつつながら、全部ウソかもしれない。実際に、そんなウマい例え話をぶらさげて毎日を生きているわけではない。

小さいものでありたい理由のひとつは、自分が小さければ、所有物を持たずに済むからだ。小さいものは所有物を持つ余地がない。

所有物は苦手だ。まず自己を所有していると、他人に対しては自己紹介をせねばならなくなる。価値観を持っていけば、価値観の紹介と説明、趣味を持っていけば、またその紹介と説明をしなくてはならなくなる。行動原理を持っていけば、その行動原理に基づいて動かねばならなくなる。

そういったことをするのがとてもなくいやだ。さらに言うところ、そういった所有物で膨れ上がっているのは老人だ。老人はある意味、所有物のカタマリだとも言える。だから老人は、老人であるということだけで、すでに疲れ切っていると思う。

所有物として、特に、「未来に向かえ」みたいなことを持たされるのが一番いやだ。そして、未来に向かっているつもりで、実は所有物に向かっているだけという、老人のパターンに倣わされることだけは御免こうむりたい。

光っていないなら未来とは呼ばない。

僕は老人を大先輩だと思っている。永遠の大先輩だ。つまり僕は、老人先輩の言うことを永遠にわからないまま生きていく。僕は小さすぎて大先輩の言うことを受け取る能力がまだない。

今こうして話しているのも、ほとんど所有物のふりをしたウソだな。こんなもの、僕は持ってやしない。価値観や原理を所有するのはこの先だ。この先と違って、微分しているから、その「先」というほうへは一切進まないのだけれども。

僕にとつては、スタート地点が一番正しいのだ。つまり数直線上で言うところのゼロ点だ。一番小さい状態の点。このゼロの点にあるときだけ、僕は僕であって、ここから一ミリでも進めばそれはもう僕ではなくなる。一ミリでも進めば老人だ。

僕にはやらねばならないことがたくさんある。あれもしなくてはならないし、これもしなくてはならない。

そして、やらねばならないことは、今後一切減らない。一ミリも進まないのだから、減るわけがない。

たとえば、恋をしなくては、とか、恋人を得なくては、とか、僕のやるべきことがあったとして、それはいくら恋をしても、いくら恋人を得ても、減らない。恋人を得たとして、次にしなくてはならないのは何か。やはり恋人を得ることだ。高校一年を終えたら、次のクラスは何年か、やはり高校一年だ。昨日、あなたは綺麗ですと告白したら、今日は何をするか、やはりあなたは綺麗ですと告白だ。昨日と同じ未来が光っている。

やるべきことが無数にあつて、それらはただやってやりつづけるためだけのもので、何かが満了するとか済まされるとかいうことはない。だから価値観なんか機能しない。価値あることを見つけたとしても、それを満了できないのだから意味がない。価値のあることも、それなりにわかるけれど、僕はどうせ価値に到達はしない。だからやり続ける。何だってやるし、やり続けることができる。

不思議なものだ、目標は無数に、確かにあるのに。誰だってスタート地点にあるときに、一番無数の目標を覗いているだろう。その目標を、塗り重ねていくだけで、目標がやがて目標でなくなる日はこない。十数年前、僕の目標は、誰でもいいからすべての女の子を笑わせることだった。それから十数年が経ち、今の目標は、やはり誰でもいいからすべての女の子を笑わせることだ。目標は今も変わらず光り続けている。これまで塗り重ねたお気に入りの



色でなお光っている。ずっと同じ未来がある。

小さいものが、小さいとは感じられない。夜空の光点は無数にあって、それぞれ極限まで小さいが、それを小さいものとは感じない。背丈の小さい女の子の、小さい微笑みが、あるいは小さいおしゃべりが、僕に比べて小さいものには思えない。

かといって大きいものとも思えない。となれば、大きいとか小さいとかいうのも価値観の中に含まれるのだ。価値観をあてがわれて、大きいですとか小さいですとか差分を言われるだけなのだ。

僕にとってはすべてのものは意味がない。価値観がないので、何についても意味は受け取れない。僕が価値観を手に入れるのはこの先なのだ。一ミリも進まず、永遠に行くことのない「先」に、これからの価値観の入手がある。僕はずっとその手前に居続けている。

価値観が欲しいとはまったく思えないのだからしょうがない。

これから何かをやらねばならないという強い心だけがある。ずっと昔からあって、ずっと昔から僕はここで閉鎖なのだ。

これから何かをやっていく、強い心。そのとおりにやっていくだろう。これまでもそうやってきた。

その中で、技術の進化を求められることはいくらでもあった。技術の進化は必要だった。技術は進化させてきた。

けれども、それで僕が一步でも「先」に出たらおしまいだ。そのときはもう「僕」が消える。僕は今の僕が大好きだけれど、この僕が消えてなくなり、あとは使うアテのない技術だけをぶらさげた醜い老人が一匹残る。

僕にとつて最悪の地獄の人生というのは、何か大きいことを為し遂げなさいと要請されて、それを為し遂げたら、「為し遂げたね、じゃあ死ぬ」と生を終わらされることだ。

僕にだって、これまで押し付けられてきた他人の価値観からの、イメージのこびりつきがわずかながらある。これから何だつてやっていくが、それが何か大きいもののように思えたら、それはとんだウソつばちの目標だろう。世界一周することだって、小さいものに見えていなければウソつばちだ。大きいものに取り掛かるうなんて、偉そうな気分になるだけで、無理なだけのウソつばちだ、人間は大きいものには手が届かない。

「小さいもの／＼」

## 自由

胸の高鳴りの中を生きていく。

ある意味、悲惨なことだ。

胸が高鳴っているということは、一種の負担を覚えているに違いないのだから。

にもかかわらず、無慈悲なベルトコンベアーで運ばれていく。

それが、自由ということの悲惨さだ。

自由において生きるということは、ある意味、一種の地獄だ。

僕は自由において生きていくので、そのことがよくわかるつもりだ。

自分が自分の手作りだと、どこで錯覚した？

自分、あるいは自己なるものは、勝手に存在している。

自己に心当たりはないのだ。

自己は操作できない。

自分が自己を操れるのではなくて、自己が自分を支配するのみだ。

自分なんて権限ゼロだよ。聞いてももらえない。

どれだけ悲惨なルートでも、自己がそれを選択する限り、されるがままに運ばれていくしかない。

自己のその無慈悲さは、こちらの胸の高鳴りを、完全に無視してくれる。

ちよつと待ってくれよ、とずっと言っているのに……

知ったこっちゃないんだろうな。自由というやつは本当にひどい。

僕は女が好きだ。女と、女の子が好きだ。

男はどうかというと、別にきらいではないのだろうが、女に起こるそれとは好きの種類がまったく違う。

男のほうには、ロマンチックなものがない。当たり前か。

女は強制的にロマンチックだ。

ロマンチックといえは、ロマンチックなのだ、勘弁してくれ、と思う。

そんなに次から次に恋人と出会って、次から次にやらかして、本当にへっちゃらで耐えられるほど、僕は頑丈ではない。

まあでも、しょうがないらしい。

食事なら、食い切れないぶんは食わなくていいみたいだが、女とか恋とか

ロマンチックとかについてはだめなようだ。胸が張り裂けるまで、胸に詰め込め、張り裂けても詰め込め、ということらしい。

このしんどさにギブアップするのなら、もう、心を捨てるしかなくなる。捨てるといっても、無視する、というだけでしかないが。

そして、どうせ自分の心を無視すると、病気になる。まったくひどい仕組みだ。

むなししい、という病気になる。そりや、心を捨てて無視して自分を運営しているのだから、むなししいに決まっているが、わざわざ、そのむなしさには耐えられないように人間は設計されてしまっている。

晩年になって大破綻するタイプの人もあるが、僕はああいふふうになるのは、さすがに興味じゃない。

もつと上品な、上等な自己に生まれつきたかったが、しょうがない。

僕にとつては、ほとんどすべての女性がヒロインらしいので、何百人かいれば何百人すべてに溺れないさということみたいだ。

これはなかなか悲惨である。

まあ、もう、無駄な抵抗はやめよう。

せめて、単なるスケベに生まれついて、マシだったと思う。

これがもし、「気に入らん者はただちに斬れ」というような自己に生まれついていたら、それこそシャレにならなかつた。

かつて、人斬りがいた世では、そういう人もやはりあったのだろうか。

人間には、躊躇の機能と、決定の機能があつて、その二つの機能は、両方ともゴミだ。

なぜなら、躊躇していたら間に合わないし、かといっていちいち決定していたら、これもやはり間に合わないからだ。

だからどうすればいいかという、すでに決定しているとおりにするしかない……のだが、こういった話し方はもうやめよう。

僕は人に物事を教えるのが苦手だ。

人に物事を教えるのに、きつと高い能力を有しているが、それでも僕自身が苦手だ。

それだけじゃなく、今気づいたけど、人に「考えさせる」のも苦手だ。

これは重要なことに気づいたと思う。

考えさせるような話し方をしてはだめなのだ。僕自身がウゲーとなつてしまふ。

人々は、悪い頭で考えるから、誤解のプロ、みたいになつてしまふ。

考えさせてはいけない。オレステキ、オマエは、知らんけど、まあステキなんちゃう、やってみないとわからん、コーヒー飲もうか、田舎より東京がいいよね、というような話をしていければいい。

楽しくなつてきたねえ。

得ることと失うことはイーブンに発生する。

お前は得てばかりじゃないか、と言われたらそのとおりだが、それにしても、得るときは得るかもしれないし、同時に失うかもしれないのだ。

ハエを叩くときと同じだ。ハエはじつとしていてる。バシーンとやれば、やつつけられるかもしれない。が、逃げられるかもしれない。何もしなければハエはじつとしたままだ。

獲りに行くということは、逃げられるということの引き金を、自分で引く行為でもある。

まあそれでも、ウデのいい奴なら、逃げられたりしないのだけれどね。

将棋の棋士でいうと、一手ずつ進めていくわけだが、勝利に進んでいるのが敗北に進んでいるのかは、終わってみないとわからない。

敗北に進むのがいやなら、そもそも一手も進めなければいいのだ。実際、敗北に進むのがいやな人は、一手も進めることができない。

だからそのところは、別にいいか、と思っていなければ、進められない。別にいいじゃないか、恋あいのひとつやふたつぐらい。あるいは友人の一人や二人ぐらい。別にいいじゃないか、仕事ぐらい。別にいいじゃないか、自分の生命のひとつやふたつぐらい……

精神的にマジメな人というのは、実はひどく強欲で、この「別にいいか」という気持ちを持たない。

そういえば、冗談でなく、マジメな人で自我防衛を持たない人は見たことがない。

マジメな人は、常に自分を守ってばかりだ。それも、とてつもなく厳重に自我防衛している。

マジメな人は、自分のマジメさを美化して捉えているが、何にマジメかという、自分が何かを失うことに対して「絶対イヤ」ということにマジメなだけだ。

それはよくよく見ると、ひどくズルくないか。

僕が、自由に生きることの悲惨さに、必死に耐えているというのに……

拍手がもらえるかどうかは、終わってみないとわからない。

拍手されることもあるが、正直、こちらにはわからないことなので、「な

んでこいつら拍手してんだ？」と思う。

でも、それは他人が勝手にやることなので、まあいいか、と思いい、「どーもー」と、放っておく。

他人のやることに、あまり興味を持たないし、他人のやることに、口出ししたくないのだ。

もちろん気分はいいけれどね。

自由に生きるということは、他人も含めた世界の中へ、自分の何かを放りこむことだ。自己に由来する何かを。

それが他人にとつてどういうものなのかは、僕にはわからない。

自己客観視という発想があるのもわかるけれど、自己客観視というのは、何も「自分が他人からどう思われているかを予測する」ということではないと思う。

せいぜい、自分が他人だったら、という視点で、自分のことを眺めるぐらいだろう。

うーん、それにしても、自己客観視という発想は、僕はいまいち好きにない。単純な、幼稚な意味においてはわかるけれども。

何しろ僕は、他人のことさえ、客観的には見られないのだ。女の子を見ると「おっ」と思うが、なぜ「おっ」となるのか、何が「おっ」なのか、僕自身にもわからない。客観的には意味不明だ。

しかも、自分がそうして「おっ」となるということが、前もってわかっているわけではないのだ。実際に「おっ」となるまでは、そんなことには決してならない、おれは落ち着いているさ、と勝手に思っているのだ。

でもたいてい、実際に女の子が目の前にいて、ニコッと笑われたりすると、「おっ」となってしまう。どうせなるんだろ、という気が経験上する。そして、そのとおりになる。

自己客観視なんて面倒くさいことまでして、効果的な自分の演出なんか、考えたくない。それなら一人でズツつけているほうがはるかにマシだ。

もし、この現代、この時代状況の中で、自己客観視を元に行動決定なんぞしようとしたら、誰でも即座に自殺したくなるに違いない。

自己客観視なんかアテにしている奴は、それだけで致命的にダサイ。それぐらい自分でわからないようでは、自己客観視ができていないだろう。

やっぱり男も女も、かっこよくないとね……

かっこよくなるのに、一番邪魔になるものは、主義とか思想とかだと思ふ。主義とか思想とかについて議論しているオッサンたちの集団を想起したま

え。

目も当てられないぐらかっこわるいはずだ。

かといつて、主義も思想も感じられない、口元がずっと半笑いの大学生も、別の方向でひどくかっこわるい。

じゃあどうすればいいかというのと、やはり自由でいるしかないのだ。

自由は、やはり、人間にとつて光なのだ。

人間はやはり、ウソをついているものがきらいなのだろう。

モテない男がやっってしまう典型的な悪パターンがある。

それは、自分がモテナさすぎること追いつめられて、「やっぱり男はぐいぐい引張っていくタイプでない」というようなことを、主義思想を持ち始めるといふようなことだ。

女性からすると、聞いているだけで寒気がするだろう。

つまるところ、主義思想とは何なのかというのと、弱り切った人間の行き着くウソだ、ということになる。

自己に由来する中に、女をぐいぐい引張っていくところなんかなくせずに、自分都合でそれを捏造しようとする、そのウソがどうしようもなくかっこわるいのだ。光がない。

それならまだ、僕がオッホホッホと笑っているほうがマシだ。

そして、突然話は変わるが、僕は何事についても、「違う」という言葉を決して言いたくないのだ。

何も違わない、とだけ言い続ける。

何も違わないのだから、誰も彼も、好き放題にやりやあいい。

僕は僕自身が何を言うのか知らないのだ。

これからの全てのシーンで、僕は何をするのか、僕自身わからない。

わからないけれど、何かをするだろう。

それは自由においてだ。

だから、きつとこのところで誤解がとける。

自由というのは、自分都合のことを言うのではないのだ。

自分都合なんて論外で、その逆、自由は自分都合を逆行する。

自分都合を無視する、無慈悲でアクティブな支配のことを、自由というのだ。

自分都合でいえば、僕だって女の子にはやさしくしたい。ひどいことを言ったりしたくないし、そこそこ好印象で点数を稼ぐこととか、イケてるおしゃれふうの雰囲気醸し出すこととか、有利なことをやっていきたい。い

きなり手を伸ばしておっぱいを揉みながら、十年前の鳥取砂丘で見た流れ星のことを、ゆったり話し始める、というようなことは、本当は僕だってやりたくない。

が、僕の自由は、そういった僕の内心の企みや事情を、完璧に無視するのだ。だから悲惨だ。

「何も違わない」というのは、僕の自由からの声らしい。  
何も違わない、か。なるほどな……

確かに、何もかも、有象無象の渦みたいなのだから、何か「違う」なんてことはない。

何かを「違う」として、その「違う」を修正していったとしても、何かは伸びたりしない。

交通事故の検証を重ねたってレーサーになるわけがない、ということのようだ。

レーサーになるためには、自由においてアクセルを踏むしかない。

だから僕は人に物事を教えるのが苦手だ。

教えるというのは、「違う」を修正していく補助をする、その営為の側面が大きすぎる。

「何も違わない」なんて言っている奴が何かを教えられるわけがないな。

僕は、自分の行動の仕方さえ、自分に教えていないというのに。

僕は文脈を組み立てたいと思う。こうして書き話しているとき、常にそう思っている。

が、僕の自由は、その文脈の構想を、一行目から粉碎してしまう。

自分の都合や、自分の気持ちや、自分の感情や、自分の思いを、優先できるものなら、どれだけ気楽なものだろう。

僕は、失敗しようのない最善の方策を採りたいのに、「何も違わない」だとか言ってる、なんでもかんでも放りこんでくる自由の、なんと無慈悲なものか。

また、それでは胸が高鳴らず、それでないと光がないということが自動的にわかるこの仕組みも、なかなか苦笑させられる、タチの悪いものだ。

好きだ、と告白すると、きらいよ、と言われる。

そこで、じゃあ付き合おう、と言い出したりする、このつじつまを気にしない確信の装置。

まったく誰も彼も愛し合えばいいと思う。

僕はその中で、とにかく女の子の貞操を盗みたおそう。

毎秒ごとにエネルギーに満ちている。

静かなものだ、大きな声は好きじゃない。

ここで唐突に終われとか、つじつまがないにもほどがある。でもこれで話は済んだらしい。次があるからここで終われ、と。

「自由／＼」

## 爆発

心が燃えている。

僕は友人や恋人より夢を大事にする。

優先順位の話ではなく、明らかな筋道の話。

夢のない人間が、誰かの友人であれたり、誰かの恋人であれたり、するわけがない。

大丈夫、友人だ恋人だと、いちいち点検しなくても、それぞれ真実ならついてきてくれる。

じっくり考える悪い習慣。

それは、自分が何でも知っていると、誤った思い込みからくる。

自分は何でも知っていると、いつからか思い込まれて、何でも知っている

自分は、考えさえすればすべてのことがわかると思っている。

そんなことはありえない。

明日のことを知っている人間などいない。

新しい一日には「ようこそ」と言おう。

それが正しいことなのかどうかは誰にもわからない。

まだ新しい一日は過ぎていないのだから。

予定がある？

予定的に過ぎていくだろう。

そうしてすべてが過ぎていってしまうだけだ。

それが予定通りのことだったのか？

新しい一日に「ようこそ」は、まるまる自分に跳ね返ってくる。

自分もこの一日を知らない者として、この一日の時間に招かれた。

「ようこそ」と。

何が有意義なのかは知る由もない。

いや、有意義とは違うが、自分が何をすべきかは、心のどこかで知っている。

知識の中にはないが、心のどこかで知っている。

今日一日を、自分以上の何かで生きるのだ。

これまでに知ってきた自分と縁を切って生きるのだ。

計画を立てるならそのために計画を立てるべきだ。

昨日までの自分、昨日までの知識、昨日までの記憶は、全て不燃物だ。ど

れだけ加熱しても決して爆発は起こらない。

今日なのだ。昨日とは接続していない。

そうすれば、自分が何をすればいいのか、具体的には知らなくても、感覚的に知っている。

具体的には知らないからこそ感覚的に知りえるのだ。

心が燃えている、この感覚がよみがえる。

自分の目指すものは、今日の中にあり、記憶の中にはない。

子供のころから爆発にあこがれてきた。

爆発的なものではなく爆発にあこがれてきた。

それが芸術なのだ、入れ知恵されたのはずっと後のことだ。

僕には芸術は要らない。

「芸術は爆発だ」なら、僕には爆発があればいい。

僕は芸術家にはならないが、爆発家であり続けよう。

よりよいもののイメージが消し飛んでいく。

イメージなど、記憶のこなれた映像化物でしかない。

イメージに旨みを探して自らの動機にすることの、なんとという浅ましさを。

そんなことで人間はわずかも豊かにならない。

断ち切れ、断ち切れ、断ち切れ……

過去の一切を断ち切れ、予定の一切を断ち切れ。

そして現時点の夢にのみ生き続けるのだ。

人間にとって、過去は未練でしかなく、予定は打算でしかない。どれだけ

工夫しても、この定義から逃れることはできない。

過去のよい方法を探す未練、予定へよい方法を探す打算。

そんなことをしなくても、あこがれは直接爆発を知っている。

「新しい一日にようこそ、あこがれの通りにやったらいい」

足場は無いのだ。

それは空を飛んでいるということ。

今日は飛んでいる、飛び続ける。

イメージの打算で妥協することのないように。

イメージとあこがれの違いは何か、それは胸の苦しさだ。

あこがれに飛び立て。

何も知らなかったあのときに還れ。

未来が予定ではなく、未来が未来のままだった、あのときに還れ。新しい一日に、すべてを知っていると言い張るつもりか？

説得ではない、説得を破壊するもの。理解も感性も飛び越えたもの。

それを定義することはできないが、定義する前からともとも知っている。もともと、それに憑りつかれて生まれてきたはずだ。

ふと落ち着けば見えてくることもある。

それは、自分のやろうとしていることのすべては、何も魅力的ではないということ。

魅力的なことは、やろうとしていたことの外側にある。

いつだってそうだ。

いわゆる「自分」は、貧しさのかたまりだ。

打算に明け暮れているだけの貧しさのかたまり。

自分がこの「自分」の言いなりになっているうち、人は永劫に貧しい。

「自分」は、隠匿された「制限」でしかない。

この「自分」をいくら加熱したって無駄なことだ。

必ず、この「自分」の外側に、あこがれがあるのだから。

いわゆる、自分と向き合うというようなこと。

これにはまだ続きがある。

自分と向き合ったなら、まず「自分」に意見を求めてみる。

そこで応えて、「自分」が意見を言おうとする刹那、その喉元に短刀を打ち込め。

意見を言う前に絶息させる。

必ずそれができるタイミングがある。

「ほら、死んだ」と。

本気になれば討ち取れる。意見を言わせてもらえるなどと甘えきつた刹那、

必ず隙が生じて、そのときなら討ち取れる。

人間は、自分など失っても何も困らないぐらい豊かだ。

豊かさを、本来追い求める必要がないぐらいに。

爆発が全ての鍵を握っている。

善良でも悪でもない唯一のものが爆発だ。

ただ許されるだけの唯一のものが爆発だ。

音のない爆発。音さえ消し飛ばすほどの爆発、あるいは、静かな空気圧のよ

うな爆発。

生まれつき人間があこがれているものが爆発だ。

小爆発、中爆発、大爆発、極大爆発……それぞれに値打ちがある。

爆発をするために生まれてきた。

爆発は手段ではなくてそれ自体が目的だ。

ずっと爆発し続けているのだ。

だから僕は友人より、恋人より、自分の夢を大事にする。

僕が爆発し続けないわけにはいかないから。

僕は僕を困らせるすべての人を愛している。

どうにもしてやれなくてごめん、とずっと思っている。

どうにもしてやれないのは、僕の責任だ。

すべて、「自分」の外側にヒントがある。

爆発というのは常に、閉じ込められたエネルギーが、内圧によって外側へ

はじける現象だから。

閉じ込められたらといって、そう必ずしも、ストレスフルでなくてもよいの

だけだ。

新しい一日によるこそ。

あなたは、何かしら、爆発するためにやってきた。

一日でも、そのことをおろそかにせぬよう、惜しんだらいい。

人格なんてものはなくていい。

そうしたものから解放放たれるために、あなたは新しい一日へ来たのだから。

う。

誰も間違ふことはない。もともと予定がないのだから。

今このとき、僕は、何を書けばいいとも思っていない。

何を書いたって何にもならない。ならなくていい。

何かが何かになるなんていつの間にも思いついたんだ？

ずっとこのままだ。何も変わったりしない。

だから安心して爆発したらいい。

「自分」の外側も、自分と大して変わらない。

心が燃えている。燃えているので、当然苦しい。

うまくない方法だ。うまくない方法だからいい。

不恰好でいい。不恰好ならなおさらいい。不恰好で許されないなら、許さ

れたことになっていない。

ヘタクソな文章でかまわない。今僕が実例に示しているとおりだ。

悪いくせが出たら身体を動かせ。パンクのように、ゾンビのように。

心が落ち着こうとしたら暴れまわれ。暴れ続ける。心が落ち着くなんて欺瞞だ。心はずっと爆発を求め続けている。

それは心が落ち着いたのではなくて失意だから。そして、失意というのは、ひどい習慣になってしまいうから。

火を止めたら沸騰はすぐ収まってしまふ。そういう物理だ。ガスコンロとヤカンでずっとそう見てきただろう。

(液体に閉じ込められた水が蒸気となって離脱する)

火をつけっぱなしでなげいけない。百年間、そうするために生まれてきたのではなかったのか。

愚かでない。

愚かさのままゆけば、自分の愚かさに気づけないのだから、立ち止まったりしない。

新しい一日に、新人、何を知ったかぶりする？

習うのはこれからなのに、何を習ってきたと言ひ張るのか。

心が燃えていれば、当然心が苦しい。

それが「夢」だ。

なんだってやれるということ。

それは、「自分」の外側で生きてゆけるということ。

これから何年間もそうしていくことができる。

すぐのことだ、すぐ、「自分って何だっけ？」と笑って仕方がないときがくる。

僕はずっとそうしてきた。

「切符をどこへやったっけ？」と、全身をまさぐる、それを永遠に続けているだけの生き方はいやだ。

切符なんかあろうがなかるうが、改札を突破してしまえばいい。

真の用事は、切符じゃなくて突破なのだから。

改札を通るのにそんなに切符が重要か。

突破すると決めていれば、切符なんてそもそも手探りもしないよ。

百年生きるということは、百年苦しむということだ。

胸が苦しいのは快感だ。

百年も続くのなら、数日そのことを気に掛けたってしょうがない。

慣れるよ。胸が苦しいのにずっと。

人間は胸を苦しめるために生まれてきて、よりお互いに苦しめうるように、文化と生活を豊かにしていく。

それは素晴らしいことじゃないか、引き下がるものか。心が燃えている。

心が燃え続け、両腕は開かれている。

全部間違いなのだ。苦しみがあること以外、全部間違いなのだ、

全部間違いなのだ、

間違いは悪じゃない。いうなれば、間違いはゼロだ。何も違わない。だから惜しみなく間違え。

そして惜しみなくすべてを燃やせ。間違いかどうかを審査する前に燃やせ。

そうして心は燃え続けている。

自分の滓を燃やし続けることは痛みと熱において苦しい。

でもそれでいい。

苦しかろうが何だろが、燃やすと決めてあつたらひたすら燃やす。

そうしたら荷物はない。

自分の滓を燃やすたび、爆発が明滅する。小爆発、中爆発、大爆発、極大爆発。それが「自分」の使い方。

「爆発／了」

## 魅力

おう、やってやるよ。  
と、常に言う。

常に言うていくしかない。  
悲愴感においてではない。

笑って言うべきでもない。  
すべてのものは流れている。

止まって見えるものはすべて錯覚だ。  
止まって見えるものは、わかりやすいが、何も「いい」という感じがしない。  
い。

流れているものしか「いい」とは感じられない。

「いい」と感じると、胸に来て、苦しい。そうなれば、それだけはまともだ。  
どれだけ架空でも、胸に来るものならそれでいい。

流れているものしか、胸にはこない。「いい」とは感じない。これは重要なことだ。  
流れているすべての物の中で、「おう、やってやるよ」と言う。

常に言い続ける。

「常に」というのは、本当に「常に」なのだ。

「おう、やってやるよ」という、応答になつてしまつては、意味がない。

そんなものは、つまらない。わざとらしいだけだ。  
すべて、流れているものの中の話。流れているものの中で、「おう、やってやるよ」と言い続けている。言葉ではなく声の話。「おう、やってやるよ」という声はずっと聞こえている。そういう人間の姿。そういう、流れの中にいる人間の話。

すべて、流れているものの中、「おいで」というと、少女がすりと脇に来る。

「行きましょう」  
それだけですべて済む。対話はもう済んだのだ。  
途端にすべてのものが実物になる。

季節や、風、青空や、雲。女の子や、穿いているスカートや、安くても似合っているヒール。髪の毛かコロンかわからない匂い。田舎なら田舎の昼、都会なら都会の夜。埋立地に吹き抜ける潮気。  
人間に悩みは必要だろうか。悩みは存在し、問題は存在するだろうか。僕にはわからない。

僕は悩みや問題を持ったことがない。悩みとか問題とかって何だ？  
悩みや問題を持ったことがないので、「対策」も持ったことがない。  
あるがままでいようとしたこともない。

「こうなればいいのに」ということさえない。

そのあたりの話は、何を言っているのか僕にはわからないのだ。  
仮に、悩みとか問題とかいうものが、実在したとしよう。

では、人と人とは、その悩みとか問題とかの上において、付き合うのか。それは何かおかしいだろう。

悩みとか問題がないと付き合えないのか、ということになる。  
どうして、「おいで」と言うのと、するりと来た、という、それだけのことで、付き合つてはいけないのか。

僕は、僕のほうが正しいとは思わないが、僕のほうでないと、「いい」とは思えない。

「おいで」というと、するりと来た、そのときの女の子が、髪の毛とスカート、および風や青空や白い雲ともども、急に実物になつて、「いい」というのはわかる。僕には、そういったものしか「いい」と感じられない。

悩みって何だ？ そして問題とは何を云うのだろう。

異性にモテないなら、それが苦しみになるのはわかるけれど、悩みになるというのがわからない。問題といえは、そこに何も問題はないように思える。

どうも、勘違いしていないか。

「対策」ありきで、「対策」を施せば、「問題」は解決する、と思ひ込んでいるのじゃないのか。

「対策」なんかしたつて、異性にモテないものが、モテるようになったりしない。なぜなら、モテないのだから。モテないものが、どうして「対策」なんかして、モテるようになるわけがある。

どうも、その「対策」という妄想が先にあつて、それに呼応して、悩みとか問題とかいうものが、概念上に立ち上がつていように見える。

そういった概念上のやりとりは、習慣になるのかもしれないけれど、すべてのものが流れているこの事実の世界には適合しない。



仮に、悩みがあり、問題があり、「対策」をどこしたとしよう。それは表面上、「解決」へうまく成り立つように見える。でもそれはうそっぽいだ。なぜなら、その男は、対策の結果、「いい」と感じられる何かにほならぬいからだ。「いい」と感じられないものが、モテるようになるわけがない。すべてのものは流れているのだ。どれだけ抵抗しても無駄だ。止まらない。

モテる男は、モテる男として流れているし、モテない男も、モテない男のまま流れているのだ。そこに善悪など生じていない。

そんな、善悪も生じないところに、問題なんか生じるわけがないし、問題が生じない以上、対策なんて生まれるはずがない。

モテる男がいて、モテない男もいる。それぞれ、同じ空間にいて、モテる男とモテない男、という形で流れている。その流れていく空間は、「いい」と感じられる。彼はなぜモテないのか、と、勝手に問題化しても、何も「いい」とは感じられない。たとえ「彼はなぜモテるのか」という前向きな側を見たとしても、やはり問題化したそこには何も「いい」と感じられるものはないのだ。

止まって見えるものは、そもそも実物ではなくて、いいも何も、そもそも「感じる」ということ自体ができない。

魅力的なものは、どっちがどれだけ魅力的かということ、比べっこしていい。比べる基準に根拠なんかないのだけれど。

それにしても、比べっこするのは、それぞれ流れているもの同士として比べっこしないと、意味がない。どっちがより、「いい」という感じがするか、それを比べっこするのだから。止まって見えるものを比べっこしても意味がない。

何か勝手に、都合よくできるものだという思い込みがあつて、「対策」をどこせば何とかなる、と思われている。それで、物事を止まって見える形に勝手に空想化して、ありもしない「問題」をでっちあげる。

「問題」があつて、「対策」を施して、「解決」する、ということは、表面上、よくできているように見える。わかりやすい。でもわかりやすいだけで、何も「いい」とは感じられない。ペンギンは空を飛べない鳥だが、それの何が「問題」なのだろう？ ペンギンは極地の風を浴びているだろう。彼らはペンギンに生まれたかわけではないだろうが、何がどうということもないまま、この世界の中に生きている。流れる時間の中を流れて、実物として存在している。

「いい」と感じられるというのは、つまり「魅力」のことだ。魅力は、思

うものではなく、感じたり覚えたりするものだから、必ず流れているものとしてある。魅力といって、止まって見える履歴書の情報を見て「いい」と感じる変人はいない。履歴書に本当のことが書いてあるとは限らないのだから。もし履歴書を見て「いい」と感じるつもりの人があつたら、それはだから「空想だ」というのだ。書いてあることはウソかもしれないし、そもそもその履歴書上の人間は存在していないかもしれない。誰かが架空で遊びで書いただけかもしれないのだ。

もし、「わたしはいい人です、いい男です」と言い張る男がいたって、それを「いい」とは感じないし、あるいは逆に、「いい」と感じるかもしれない。それは実物に触れないとわからない。その、流れているものとしての実物に触れないとわからない。「わたしはいい人です、いい男です」と言い張っているのは、まるきりウソかもしれない。でも、目の前にそうしてウソを言い張る人間がいたとして、それだつて何かしら「いい」と感じることはないと言ひ切れない。

空想と実物は違うものだ。比較的違うのではなく、そもそも比較する類ではないということ。Aについて空想したものと、流れているA実物とは、完全に無関係のものだ。

おう、やつてやるよ、と言ひ続ける。言葉のことではなく声のことだ。流れの中、その声はずつとしている。常にその声がある。

僕はそのようでありたい。僕はそのようであることで、魅力的な人間でありたい。

「いい」と感じられたいし、僕自身が「いい」と感じるものの中へ、ちゃんと混じりこんでゆける自分でありたい。

もし、「いい」と感じるものが目の前にありながら、自分が入り込んでいけない、混じりこんでいけないということでは、悲しすぎるだろう。

今、考えておかねばならないことがある。魅力について。

僕は、人は魅力によって差別されるものだと思う。魅力のあるなしによって差別されることが、まっとうで、誇らしいことだと思っている。

僕は、僕自身が魅力的であることを、証明し、実現するように生きている。誤解を恐れずに言うなら僕は、

「僕が魅力的であることが証明されればそれだけでいい」と考えている。

なぜか？

これについては、他人をどうこうなんてできないからだ。

僕にやる気がないのでなく、物理的に無理だということ。

実物が実物に何かを足してやることは不可能だ。

御影石が流木に何かを足せるだろうか？

そんなことは、もう何を言っているのかわからない、意味不明だ。

魅力について考えておかねばならない。魅力に関しては、僕は僕限りだ。

他人のことはどうにもできない。

すべてのものは流れているのだから、僕だって流れている。僕のいる場所、僕のいる空間は流れているし、僕は実在としてはその流れの中にあるしかない。

そのときに、僕は僕として魅力的であればいい。「いい」と感じられうる何かがあればいい。「おう、やってやるよ」の声が聞こえてくるのもその一つだ。魅力の一つ。僕はそういう奴でありたい。

もっと平たく言えば、僕は僕がモテることを確認できればそれだけでよいのだ。「いい」と感じられるというのはそういうことだから。

僕が、モテない男に何かを足してやれるわけがない。何かを足してやって、モテないものをモテるものにしてやれることがあるわけがない。足すといったって、実物がそれぞれ違うのに何を足してやれるものやら。モテない男は何も問題ではない。モテる男が何も問題でないのとまったく同じに。

魅力について、誰もが鋭敏でありますように。魅力のあるなしは、誰にとっても身近に必要なことだ。魅力について考えておかねばならない。

「まったく魅力のない人間」というのも少なからずいる。最近が増えているかもしれない。そしてそういう人は、何もわかっていないので、何を言われたってうつつ半笑いである。「きみにはまったく魅力がない」と言われても、よくわかっていないので半笑いなのだ。そういったやりとりの景色も流れていくが、本来、魅力がまったくなくないというのは青ざめるような恐怖のはずだ。

何をするにしたらって、誰もが無心で力を尽くすのはすばらしいことだ。気づけば誰もが無心になっている。皿洗いとか部屋の掃除とかいうことでもいい。皿洗いなら皿洗いを、やらされたら無心にやる。一所懸命やる。やり続けている。きよとんとした顔で、無邪気で熱心だ。素直。頬に血が通っている……。こういう人間はそれだけで魅力がある。止まって見えない。彼女が「どういう人」かについて、止まって見える説明や空想を足すより、その無心にやっている皿洗いの実物を見るほうがとっさり早い。その皿洗いの無心な姿は、「いい」と感じさせるだろう。無言で熱心で、それでも姿から「や

りますよ」という声が聞こえ続けている。

魅力によって差別される。それでよいし、誰だってそのようにしている。

他ならぬ、魅力に劣る当人さえ、他者を見るときは魅力において差別的に見ている。それは差別的でありながら、決して冷たいことではない。わざとあたたかいことでもないけれど。あえて言うなら堂々たることだ。魅力のある者はよりこれからも魅力を得ようとし、魅力のない者はなんとかならないかと呻吟し、なんとかしてやはり魅力を得ようとする。

そしてさしあたりの事実として、魅力ある者もない者も、実在するのだ。

この時間の流れる世界で、流れながら、背中を丸めて。それでこれを読む者も、このわかりづらい話の中に、自分が得なくてはならない魅力への手がかかりがあるのでないかと疑い、秘密を食い破ろうとして読んでいる。そうしてわたしたちは実在している。ふと気づけばそれは魅力ある事実だ。魅力について止まってしまった思考であれこれ考えるより、その実在の姿のほうが。物理学へ初等の知識のある人へ。魅力といって、その「力」、「力」の単位は何であったか。[kg・m/s<sup>2</sup>]、物体に加速度を与える作用のこと。単位の中に「時間」が入っているぞ。もし魅力が人の心を動かすのだとしたら、ここに時間の流れる経過を取り入れずにいることは、魅力が人の心を、ワーブさせる、という議論をしていることに他ならない。熱力学の法則を無視したハチャメチャな理論だ。量子や素粒子のようなマイクロ世界を別にして、この世界で流れて動かないものがあるだろうか？

やってやるよ、と声が出ている。音の始まりがない声。気が付けばそこに張りつめてある声。流れる時間に貼りついたままある声だ。こうして流れ続けたままある「やってやるよ」の方針が、一度も止まることがない以上、何もあってそれが正しいとか、あやまっているとか言えようか。「やってやるよ」と、ただそうして流れていくというだけのこと。思いつきの正反対、やり方がないかわりに止め方もないもの。

何事もやってこなかった人がある。何事にも力を尽くさずに生きてきた者。そうして生きていくことはまったく不可能だ。それだって何の悪徳とも言えないし、この世界から何も逸脱していない、やはり事実の一つに過ぎない。流れたまま立ち止まらずにいる者が、どうしてそれを指差して悪徳呼ばわりできようか。物事の善し悪しなどは立ち止まってしか言えないのだ。

ただ明らかなこととして、何事もやってこなかった人間、何事にも力を尽くさずに生きてきた者は、これまでに蓄積してきた魅力の実績がない。魅力のない生は罪ではないが、なにより本人が、魅力のない生を生かされてきた

ことを悲しんでいるはず。魅力のなさから差別されて、可能性のない未来を生かされることのつらさも併せて。だから他でもない、自分、本人のために、誰もが魅力について鋭敏であるべきだ。

そして魅力に鋭敏であるということは、きっと時間について鋭敏であるということだ。

だから時間を大切に。底抜けに大切に。時間について、出し惜しみすることなく大切に。やってやるよ、と、ずっと時間に貼りついたまま生きればいい。しばしば人が陥る愚かしさ、魅力がないのにいい思いをしようと企むことで、不満を蓄えていくというような、ヌケヌケとした厚顔を、なるべく晒し続けることのないように。

「魅力／了」

## 熱

熱い自分がある。

まだ熱い自分があつて、僕は熱い自分が好きだが、これがいつまであるものなのかは、わからない。

今はまだ熱い自分だ。

いつか冷たい自分になるのだろうか。

わからないが、そのときはもうジタバタしたくない。

ジタバタするのは、見苦しいし、男らしくない。

熱い自分が、なくなってしまうことなど、想像もつかないし、まるで信じる気にもなれないが……

でも、もし、こうして熱い自分が、失われてしまうことがあるのだとしたら、そのときは自分で自分を救済したり、ケアしたりということをしたくない。

そのときは、ちっぽけな器量と命数を使い果たしたということなのだから。悪あがきして、外国製の情熱を輸入して延命したりしたくない。

インスパイア、という考え方が流行っている。

僕はこれには、まっぴらごめんだという感じがする。

インスピレーションを「ひらめき」とするなら、インスパイアされるということは、「ひらめきを与えられる」ということになる。

僕はインスパイアなどされたくない。

自分の熱が失われたところに、外部から熱を借りてきて、自分が燃焼しているふうになるということへ、逃げ込みたくない。

人と人とは、お互いに燃え立たせるものだ、という考え方があつた。

それはわかるが、その考え方は、合理的すぎていやだ。

自分の熱に、そんなシケた合理性を持ち込むぐらいなら、いさぎよく挫折するほうがましだ。

そんなことは、これまでも今も、ずっと想像にも遠くて、現実味がないけれど。

もし、それはお前がお前だから傲慢だ、と言われることがあつても、「そのとおりだが、何だ」と、弾き返せるように、僕は在り続けたい。

熱というのは、熱い寒い足し算で段取りするようなものであってほしくない。

体調管理という考え方が流行っているから、水面下に、メンタル管理、みたいな考え方がはびこっているのかもしれない。

国際的に結果を出さねばならない責任あるスポーツ選手だとかいうならともかく、ちっぽけな一個人が生きていることではないか。この場合は、管理などというあさましいことはしたくないものだ。

人間として熱があるということが、人間の実存に及びうるものだとしたら、熱のない人間というのは、精神的には透明人間みたいなものだ。いるのかわからないのか、確認しないとわからなくなる透明人間。

透明人間になってしまったらどうなるのか。どうなるのかは知らない。知っていてもどうしようもない。どうするかはそのときになってから考えればいいだろう。どうせそのときには何もかもが変わっているのだ。

熱い人間とはどのようなものか。まったく単純なもので、腹の中に湯を抱えている人間だ。

例え話ではなく、身体的な感覚、あるいは心身的な感覚として、湯、が腹の中にあるのである。

人間は37度の血袋なのだから別におかしい感覚でもない。

37度の湯のかたまりは、触れてみるとはつきり熱い。

この湯が、僕に、くだらないことをしきりにさせようとする。

まあ、そうなると、されるがまま、従順にそうするしかない。

別に恋あいが偉いと思っっているのではないし、芸術が偉いと思っっているのではない。

むしろくだらないことだと、わかっってはいるのだが、腹の中の湯がそのくだらないことを、咄嗟にさせるのだからしょうがない。

僕がくだらない人間になってしまっっているのは、この湯のせいだ。

くだらないことばっかりしている、自覚はあるのだが、この湯のせいで、どうしようもない。

僕はわりと、普段から猫背かもしれない。猫背？ とはまた違うかもしれないけれど。

ただ、胸を張ってすつきりと立った、あの形に、僕はなりたくないと感じている。僕はこれが前傾姿勢なのだ。腹に湯を抱えて前傾姿勢になればこうなる。腹の中を空っぽにして、何も運んでいない人間として、こぎれいな姿勢を取ることは、僕は反発する。

誰がというのではなく、僕がそうなることを選ばないだけで。この不恰好な僕にも、あなたはあたたかさの次元が違う、と言ってくれた人がいた。

底抜けに綺麗な人で、一度は僕から遠ざかることを選んだが、思い直して、もう一度僕と心を親しくしてくれることを選び、戻ってきてくれた人だ。

あたたかさの次元が違うと言われて、僕は、ありがとう、あなたはきれいだよ、としか言えなかった。

その人は、本当に、底抜けに綺麗な人だから。

僕にだって、そうしたことが、素晴らしいことだというのはわかるけれど、まるで僕のような不恰好には、感動する権利なんてない、という気がする。そんな上等すぎるものへの感動なんて、僕にはなくていい。そりゃ、内心では、メロメロになってしまふところがあるけれども。でもそういうことじゃない。僕がそうして綺麗な人に言えることは、あなたはきれいだよ、ということしか、結局最後までない。

同様に、というか、逆に、僕のことを嫌う人だっている。それはそれと感ずる。

僕は、人に好かれようとか、好感触でいてもらおうとか、そういうことの工夫が、自分には似つかわしくないと信じている。

この不恰好のまま、そのまま、直線的に嫌われることは、何もおかしくない、ありふれた正当なことだと感ずる。

ただ一方で、誰にとつても、そんなことは大事でも何でもないのだから、気にしないでほしい、という思いがある。

僕のことを嫌った人には、まずそのことを思う。僕のことを嫌いな人にとつて、僕のことを嫌いであるという自己情報は、まったく重要でない。注目するだけ損で、時間の無駄だ。

僕は、好き嫌いの関わらず、そうして正当な話は正当なものとして通じるということに、気分よさを見出している。

腹の中の湯がどうこうなんて、僕の話だ。僕は腹の中に湯を抱え、その湯を漏らしたりするようなことは好まない。湯について覗きこんだり、調査したり、議論したりということも、好きではない。

腹の中に湯はあるが、これは別に有用なものではないのだ。

これが一体何なのかについては、他ならぬ僕自身が考えていない。

腹の中の湯は、くだらないことをしたがる。僕にくだらないことをさせたがる。大切に思えることはさせたがらない。まるで魔法瓶のように、ただ湯

を抱えていなさいと言わんばかりだ。

湯は、女の子を口説きたがり、モテたがり、同時になぜか、フラれたがっでもいる。ひどい話で、だから僕の振る舞いは常に利益に向けて合理的でなくなる。

僕は冷たいのだろうか。そう思えて自分が厭になるときもある。けれど、あたたかいふりをするのはさすがに決定的に冷たすぎる。第一、似つかわしくもないので、わざわざそんなことにトライする気にもなれない。

僕にだって情緒はあるはずだ。あるいは話したいことや、伝えたいこと、わかってももらいたい気持ちのことが、僕にだってあるはずだ。

あるはずなのだが、肝心なところで、この腹の湯が「いいや」と、急に全てから手を離す決定をする。

「いいや」と言われると、もつともらしく聞こえてしまう。それに抵抗なく乗っかってしまう僕も、どうかしているけれど。

誰にとつても、この湯は、腹の中にあるものなのだろうか。わからない。知りたいとは思えないし、あればあるでよいと思えるし、なければないでよいとも思える。なにより、そうして人を覗きこめるような、上等な自分ではないしなと思える。僕が思うのではなく、腹の中の湯が。たぶんたふんと、前傾姿勢で決定する。

もつとさわやかな人間でありたかったなあ、などという、それこそヘソで茶を沸かすような、幼児的なあこがれが、本当は僕にもないではなかったのに。まあしょうがない。人は二重には生きられないだろう。

結局、こうして行くしかなくなる。僕は決して、孤独が平気な人間ではないし、ともすると、誰よりもアマツタレで、寂しがりなのじゃないかという気もする。ただ、湯が僕を前傾姿勢にして、何もかもをふと「いいや」と決定する。本意がないわけでは決してないのに。どれだけ入念に本意をこしらえ、準備していても、いざとなると湯気に当てられて、本意がどこかへ揮発してしまう。「いいや」と、歩き出す、その前傾姿勢が始まってしまふ。

僕は決して知能は低くないはずなのに、そのせつかくの計算能力が、肝心なときにはまるで活かせない。

何だっけいいだろうという気がしている。

たちの悪い……僕はなぜ自分が歩かされているのかわからないまま歩いている。

僕にだって青春のチャンスはあった。そこでうまいこと、僕だって青春が

やりたかった。結果的に、青春は、胸を壊しかねないぐらいあったのだけれど。思えばそこで、これは注ぎ込まれたのか。この腹の中の湯は。

僕は浮かない顔をしているだろうか。

たまにな。

でもそのときは、たいてい、僕は自分の湯加減に、諦めきっているだけだ。

どんなときでも、あなたの手を引いて突然歩き出すぐらいの余裕はある。

そのときは猫背でごめんさい。

そんなものが受けるとは思っていないし、くだらないことだと、さすがの僕でもわかっている。

そういう、ただの湯としての熱い人間を、あなたが好きか嫌いかは知らないが、どうせなら好いてもらえたほうがうれしい。

キラ伊だった場合、あまりにもその自己情報には、意味がなさすぎるからな……

まだ熱い自分がある。これから先はどうなるのかわからない。

わからないが、何がどうなったって、ジタバタ抵抗する気はない。

別に熱いものが偉いというわけではなからうし。

熱いものがなくなったら、きつと僕は僕自身が好きじゃなくなるだろうが、まあだからといって、こんな奴に手厚いケアをしてやろうとは、さすがに僕も思わない。

どうなるだろう。

正直、湯の量は、以前より増えていると感じている。

この湯を注ぎこんでいるのは誰だ。

僕を好いてくれている綺麗な女の全員か。

「熱／了」

## 計画

計画は善のものだ。

今、計画を立てている。

人は、計画を立てなくても、まともに生きてはゆけるが、計画なしでは、余分なものがない生になってしまう。

もちろん、計画と違って、計画を本質と見誤ると、まともに生きるという

ことができなくなる。

計画というのは、人間がまともに生きるぶんには、余分なものにすぎない。そして、それが余分であるという点において、計画を持つことは善だ。

今、計画を立てている。

そして計画とは、基本的に部外者には秘密だ。

ここが、まったくのミスだと思うが、計画が立てられるということは、それを実現できる、ということだ。

なぜなら、計画を立てられるのだから。

計画が立てられたら、あとはそれを遂行してゆけばいい。

そもそも、実現できないものなら、計画そのものが立てられないはずだ。

計画を立てて、なおその実現が得られないとしたら、途中で計画を忘れてしまったか、もしくは途中で死んでしまったときだけだ。

誰もがそうして計画を立てている。

計画は自由に立てられるのだから、これを自由計画と呼ぼう。

計画できない唯一のことは、過去のことだけだ。

誰もが計画を立てる。たとえば、現在から七年後に、十億円の現金資産を持つと、という計画を立てる。

それを達成して、何になるというわけでもないから、これは余分だ。

この余分に向けて計画が立てられることこそ、まったくの善だ。

余分のある生は、若干、洒落が利いている。

七年後に、それぞれみんなは、何歳だろう？

こうして夢が膨らんでいく。それが余分であるからこそ、夢は膨らみうる。

計画とはまるで、護身用でない拳銃だ。護身用は、実用的で、あまりに切

実なものだから……

護身の用事もないのに拳銃をぶらさげている。これを、余分と言いたいのだ。

拳銃をぶらさげていて何が悪い？ 趣味でも何でもなくぶらさげている。

さてそうして、七年後に十億円の現金資産を掴みたい、という人にとって、計画が重要になってくる。

現段階では、さしあたり、現金輸送車を襲撃する、ということを考えてもいい。

七年間もかけて計画を練りこめば、頭のよい人ならきつと成功するだろう。こういう言い方をすると、「そんなバカな考え」と言われてしまうかもしれない。

でもそれが計画だ。

ここでもし、現金輸送車を襲撃するとか、犯罪者になるとか、指名手配されるとか逮捕されるとかの、違法性のリスクを背負いたくないという場合は、まずそのことを計画に入れておかなくてはならない。

つまり、

「違法性のある手段によることなく、七年後に十億円の現金資産を掴んでいること」という計画にしておかなくてはならない。

そうでなければ、ただの計画の不備だ。

僕は今、計画を立てている……

幸い僕には、アウトローへの願望はないので、ことさら違法性をよるような計画を立ててはいない。

どうせ部外者には秘密なので、何も話せることはないけれど、少なくとも、これは余分なことに向けての計画。

余分なことに向けなければ、夢はしぼむ。

人間には確かに必要なことがある。でも、人間にとって、必要なことがあるということは、悲惨なことなのだ。

たとえば、最低限の生活とか、健康とか、平和や治安などは、どうしたつて必要だ。

それを無しには生きていけないというのが、人間の悲惨さだ。

悲惨さに対抗する、必要性の蓄積も、やはりそれ自体必要だ。けれども、

それに向けての計画は、いつだって夢をしぼませる。

さらに悲惨なことには、夢をしぼませる計画に、人は自分自身で絶望する

のだ。絶望のあまり、やけくそでしか動けなくなる。

そちらのほうはさしずめ、必要計画と呼ぶことにしよう。

余分なことへ向けての自由計画と、必要なことへの必要計画とを、取り違えたとき、人は計画において、夢をしぼませる。

見栄や自尊心の慰撫に必要な何かを、計画に練りこんだ必要計画は、何も自由ではなく、人を自己的に絶望させ、夢をしぼませるだろう。

もし、七年後に、十億円を掴んでいることが「必要」だった場合、その必要計画は悲惨だ。まともに生きるのに、十億円も必要とするようでは、そんな人間は悲惨に決まっている。

違法手段によらず十億円を得るためには、たとえば百円の利益が出るものを、一千万個売らねばならない。

ここで、まず、累計一千万個売れるものとはどういうものか、ということについて考えなくてはならなくなる。

こうして人は、ようやくまともに、物事を考えるということが始める。

余分なことには違いないけれど。しかし余分なことというのは、不覚にも楽しいものだ。

一千万個は一日では売れまい。だから累計ということになる。

一億人の客層があったとき、十人に一人がそれを買う。そう考えたとき、「十人に一人も買わないだろう」という気がする。

だから、「一個買った人は、二十個買ってしまおう」というような商品を考えればよい。商品のバリエーションのことも含めて。あるいは、「せっかくだから全種類買ってしまおう、集めてしまおう」と思わせるところがあればいい。

そうして、一人あたり二十個買う商品になれば、一億人の客層のうち、二百人に一人がそれを買う、ということになればいい。二百人に一人というぐらいなら、そう不自然な感じはしなくなる。

一個あたり百円の利益だから、二十個で二千円の利益。購買客一人あたり二千円の利益で、購買客が五十万人いればいい。

四百円で作ったものを、五百円で売るということは、さして難しくないだろう。問題は、それをどのようにして、一億人の客層へ届かせるか。手元に、せめて情報だけでも届かなければ、客は購買しようがない。また、その商品の実物をどのように配送するか。あるいはは分配するか。

加えて、その百円の利益を出す商品を、二十種類、生産するだけの能力、生産性が要求されてくる。一つの商品を作るのに一年間かかっている、二

十種類を作るのに二十年かかってしまう。それでは計画が破たんする。

最低のペースでも、一年間に三種類は、その商品をリリースしていかなくてはならない。その生産性は、努力や、知恵や、才能や、蓄積によって生じるだろう。この生産性を自分の手元に用意することが、最も手近な大前提となる。

また、累計で一千万個売れなくてはいけないのだから、その一千万個を生産する、設備やシステムも必要だ。

あるいはこうも考えられる。年収一千万円のサラリーマンが十五人いたとする。年間の給与は計一億五千万だ。彼らの七年分の給与は十億円を超える。

だから、自分一人で、年収一千万のサラリーマンが生み出す生産性の、十五人分を賄えれば、七年間で十億円の獲得に到達しうる。時間の限定と、自分に有利な分野を選べるという前提の上ではあるが、その七年間は、一人対十五人で、自分が同等かもしくは勝利せねばならない。生産性において、彼らが週に四十時間働くのなら、自分は週に六百時間分の仕事をこなせねばならない。残業もするものだろうから、すなわち、

「彼の一日の仕事量は、普通の人間の百時間分に相当するね」

「彼は、普通の人が十五分かかるところを、一分でこなしていつてしまおう」

「普通の人が、二つの仕事を同時進行させるとしたら、彼は三十個ぐらいの仕事と同時に進行しているよ」

「彼は、一日休むだけで、まるで半月もバカンスに行ってきたかのようにすつきりしている」

「ぼくには十五年来の友人がいるが、彼はたった一年で、ぼくよりもその友人と信頼しあう仲になってしまった」

「彼は7%の情報からでも、即座にその人間全体の本質を見極めてしまおう」

「彼は一日で計画を立て、一日でそれを潜在意識にまで落とし込んでしまった。一か月の講習予定は無駄になってしまった」

という状態でなくてはならない。

となれば、アイディア一つでどうこうというような、甘いイメージのことではなくなるだろう、という予感が得られる。物事をこなしていく速度も、キリキリして急いだところで間に合わない、ということがわかる。まるで

ワープするかのように進んでいかなければ成り立たないことだ。

その分の覚悟も計画に練りこまれてゆく。

このようにして計画は立てられていく。計画は、常に鮮やかなものだ。

乾ききつたスケジュールなんか立てても、人は自分を苦しめるだけで、何にもならない。

計画が鮮やかだからこそ、人もそれに合わせて、鮮やかな何かになりうる。これらはすべて余分なことだ。余分なことへ向けての、自由計画。だからいくらでも鮮やかにしたらよい。

こういったことを、自分に「必要」なものだとして、シヤカリキになってゆけば、人は損耗して破綻してしまうだろう。

人は、自由なことをさせてもらえるぶんには、際限のない能力を発揮するが、強迫されて物事をさせられるときには、ごく限られたみじめな能力しか出さないものだ。

人間の能力の99%は、余分なこのためにしか用意されていない。

例えるならば、旅客機のファーストクラスだ。ニューヨークまで、格安航空券なら十万円。ファーストクラスなら百万円だ。ニューヨークに行くためには、飛行機に乗る、必要がある。運賃そのものは十万円だ。ファーストクラスの場合、それに余分な九十万円分がついてくる。

人間の能力はそれよりもっと偏っているのだ。必要に向けてでも、十万ポイントぐらいの仕事はする。しかし自由に向けてなら一千万ポイントぐらいの仕事をするものだ。遊んでいるような奴のほうがめきめき物事に達者になるというのを誰もが目撃してきている。遊んでいる奴は疲れない。遊んでいる奴は、それが遊びであるため、えんえん、しつこく、飽きもせず、夢中になって繰り返ししている。

計画が、余分に向けてなら善だということは、人間にとって遊びが善であることと同じ。すなわち人は、「計画を持つ」という遊びをすることができ

る。絵画にせよ彫刻にせよ、人間がこと遊びとなったら、どれだけ綿密にそれを創り上げて遊ぶものか。計画は練り上げられ、磨きこまれ、それ自体が一つの作品となる。部外者には秘密で、秘密というところが気が利いている。

この秘密を共有しえた有資格者が、自然と「仲間」と呼ばれるのだろう。僕は今、計画を立てている。

「計画／了」

## 欲望

(頭上、墨汁のような雷雲に紫色の稲光がある。地上に降りてきた電磁波オーロラと、見たこともない悪霊と鳥獣の戯画が、風に重なってひしめいていく。臨界を超えてなお濃厚に、景色は圧迫を増し続ける。目を細めて……この野原の先は何億キロメートルあるのだろうか？ 手元には銀色のハンドガンと、目の前には這いつくばった、毒針を持つ一人の老婆。)

欲望は抑圧されている。

だから、欲望の体験を得るためには、何であれ、世間から離脱させなくてはならない。

世間は、人間がやがて死ぬということ、その恐ろしさを忘れきること、成立している。

世間は、暴力や、迫害、人が人を殺すことなどを忘れさせ、抑圧することで機能している。

世間は、欲求についてまでは理解しているが、欲望については理解していない。

喉が渴いたから水を飲みたい、どうせならコーラを飲みたい、という欲求とその充足については、世間も了承している。

了承は欲求までだ。

だから、暴力や迫害や殺人の事件が起こったときには、世間はその犯行の「動機」を探す。

金銭目的だ、とか、痴情のもつれだ、とか、怨恨だとか復讐だとか、心理的に追い詰められたからだ、とかだ。動機に欲求を結び付けて納得しているとする。

欲求については、欲求そのものが動機だから、世間のこのやり方は滑らかに当てはまる。

どうしてもお腹が空きすぎて、つい店頭のパンを盗んでしまった少年、というようなものは、「わかるわかる」というふうには受け止められる。

性欲が抑えきれず、十五歳の女の子をカネで買ってしまった、というような話も、お下劣だが、性欲という欲求の点で、まあ「わかる」という範囲に



収まるだろう。

しかし、欲求はそうでも、慾望ということになると話が違う。

慾望には、背後にさかのぼれる動機がない。

慾望とは、具体的にどういふものかについて、ここで書き話すこともできるが、それこそ世間体に憚りがありすぎるので、どうしても差し控えたくなってしまう。

少なくとも、慾望と欲求は違うのだ。

欲求は、その字の通り、求めているから、それをやる、という仕組みだ。

慾望のほうはそういう合理的な仕組みがない。

たとえば、言いやすい例でいえば、「ルパン三世」というアニメなどがそれにあたる。

ルパン三世が、今さら金銭目的でドロボウをはたらいているとは言えない。ルパン三世がお宝を盗むのは、もはやそれが、「お宝」だからだ、としか言えない。「お宝」を手にした、という、ただそれだけの慾望によって、ルパン三世は盗みを続けている。

だから僕は子供のころから、ルパン三世が好きだった。今も好きだ。

同じドロボウでも、アルコール中毒でどうしても酒を飲みたかったから、ということとで空き巣に入るコソドロと、ルパン三世とは、行動の原理が違う。

性的な欲求についてもそう。性的な欲求は、男性の場合、定期的に欲求が「溜まる」という肉体のメカニズムがある。

この欲求を解消するために、男性は自慰をしたり、性風俗で女性のサービスを買ったりする。

そうした欲求解消のために、交際相手に協力を求めることもあるし、夫婦であれば、妻に協力を求めることもある。

それは何もおかしいことではないし、そうした肉体のメカニズムからくる欲求があること自体、ロマンチックと言えばロマンチックの一つだが、あくまで欲求といえどそこ止まりで、見ようによっては阿呆くさいと言えなくもない。

女性としては、付き合っているからとか、結婚しているからとかの理由で、欲求の解消に協力させられているというような、阿呆くささに貶められたくないから、そこに「愛」があるかどうか、ということを重視しようとする。

ただしもちろん、ほとんどの場合、その「愛」なるものが何なのかについては、あいまいだし、個人によってバラバラだ。

個人によってバラバラどころか、その個人内においても、その日の気分によってバラバラだったりもする。

とにかく、欲求と慾望は違うわけだ。

欲求のほうは、世間にも理解され、了承されている。

欲求には動機があつてわかりやすい。

男性には性欲の溜まりがあるから、自慰をしたり、性風俗でサービスを買ったり、交際相手とセックスしたり、妻とセックスしたりということを、世間は問題なく認めている。

欲求の中には、より興奮したい、よりオーガズムを得たい、という欲求も含まれるので、コスチューム・プレイをしたり、電動の器具を使ってプレイしたりが、営まれている。

それはまあ、「好きだねえ」という揶揄がついてくるものの、それでもなお、世間の理解する範囲から逸脱はしない。

S Mクラブに通つて、両者合意の上でハードS Mのプレイを営んでも、それはプレイ内容が過激なだけで、原理としては、やはり世間の認める範囲から逸脱はしていない。世間だってバカではないので、人それぞれにいろんな欲求があるのでしよう、ということぐらいは、個人の権利として尊重されている。

世間は、運営のルールさえ守れば、ありとあらゆる「プレイ」を、問題なく認めているだろう。趣味の合う合わないは、もちろん人それぞれだけれど、ただ、慾望については違う。

慾望は、欲求を根底にしていない。

慾望には動機がない。

慾望は、その目的さえよくわからない。

欲求は、「こういうことがしたい」という欲求に基づいて、それをすることで、まだわかりやすいのだが、慾望というのは違うのだ。

慾望はむしろ、したくもないことまでしてしまうので、合理的には説明不能だ。

つまり、慾望というのは、「何をするのか深刻にわからない」という性質がある。

この不可解さが恐怖なのだ。

この不可解さが恐怖なので、世間は慾望のことを抑圧している。

世間的に生きていく人間は、慾望についてのことを、一生知らないまま生きていくことだって少なくない。

もちろん、何かおかしいな、とは、うつすらどこかで勘付きながら、ということにはなるが。

この、「不可解さが恐怖」ということは、人間の死に似ている。

人間にとって、人間が死ぬ、ということとはわかってても、自分が死ぬ、ということとはわかりづらいものだ。

誰しも百年後の桜は見ないだろう。百万年後には人類はすでに無いと思われる。百億年後には地球そのものが無くて、この宇宙に人間が存在したという、知識や痕跡までがまるごと消え去ってしまう。

そうなると、はたして、人間なんてものは、存在したのか何なのか。何のために存在したのか。存在うんぬんを知覚する主体そのものがもうないのだから……

と、こう考えていくと、不可解すぎて恐怖に至る。たいてい、その恐怖の前に引き返すものだけだ。

世間は、理解しうるものについては鷹揚だ。理解しうるものについては認めようとし、コントロールはするが、抑圧はしない。

理解し得ないものについては冷たい。恐怖からだろうが、世間は不可解なものについては抑圧する。

それで、万人にとつての自己の死や、暴力、迫害、殺人、といった、不可解さに隣接する物事を抑圧する。忘れさせようとするのだ。

無意識下に抑圧してしまえば、そんなものは、恐怖ともども、「そんなものあつたっけ？」というレベルにまで忘れることができる。フロイト的忘却ともいう。

これは、自我人格の安定のために必要な仕組みだ。この安定の仕組みに、世間は強力な貢献をしている。

もし今、世間性を代表するテレビメディアが、急に一斉に放送をやめたら、自己の死に隣接した老人たちは、次々に自我人格を崩壊させていくだろう。

定年退職になった老人が、退職後すぐに精神的に失調して、医者に掛からなくてはならなくなったりするのは、やはり職場という世間性の、自我安定化作用を急に失うからなのだ。

世間性の庇護から離脱してしまうと、自己の生と死という、不可解さの恐怖に、急に生身で向き合わされる。それがしばしば、鍛えられていない人の自我人格を損傷させてしまう。

ともかく、欲望というのも、それら不可解さの恐怖の一つとして、世間において抑圧されている。

もちろん、抑圧していても、それらは消え去ったわけではないので、場面が非世間的な状況に陥ると、人間はやはり、深刻に動機のわからないことをする。

直言は避けたいが、たとえば歴史資料のいくつかは、人類史上に起こったとんでもない「悲惨」の例をレポートしている。人類史上、振り返れば数限りなく、非世間的な状況が起こってきた。

歴史資料のレポートが示すところのすべてを、人間の「欲求」で説明しきすることはまるで不可能なはずだ。「なぜこんなことを」ということがいくらでもある。

「なぜこんなことを」と、不可解な恐怖が走るところ、人間の欲望が見え隠れしている。

歴史資料の示すように、人間の欲望は危険だ。欲求なら、まだコントロールしうるし、充足への手続きを与えてやれば、暴発はせずに済むけれども、欲望はそもそも動機もなければ充足もないので、コントロールできない。

この危険極まる欲望というものを、どうしたらよいだろうか。

一つにはやはり、世間がそうしているように、抑圧してしまうことだ。危険物を、どう取り扱うかではなく、取り扱いそのものをやめてしまう。地下に封じたまま、忘却してしまえば済むことだ。万が一のため、その周囲は世間的に強固な立ち入り禁止区域にしておく。

もう一つには、危険物なら危険物として、それを専門家のように、熟練して自ら取り扱うことだ。不可解さの恐怖に呑みこまれず、確かな手つきで、危険物に直接触れる。

爆薬や核燃料と同じで、危険物は、危険だからこそ、それ自体がエネルギー源になる。もちろん安全に取り扱えるという前提の上でだ。

人間は、エネルギーのある体験を求めているし、そもそもエネルギーの無いものは「体験」にならない。

どれだけ過激なふうでも、それが「プレイ」では体験にならないのだ。歴史資料の中には、どんな「プレイ」も記録されていない。それは人類が得た体験ではないからだ。

人間は誰しも、エネルギーのある「体験」によってしか、本質的には鍛えられないということを知っている。

欲望は、危険物であり、エネルギー源たりうるから、欲望によって体験を得ることができる。

欲望の体験を得るためには、何であれ、世間から離脱させなくてはならな

い。

「何を」「誰を」、離脱させねばならないのかは、今ここでは話せないことだ。

誰もが通信端末を常に携帯するようになることで、世間性の庇護は二十四時間体制になった。

それによって、自我人格の安定は、より盤石になった。

が、そのぶん、「体験」を得る機会は激減し、人間として鍛えられる機会も激減した。

もちろん、端末を手放したところでどうにもならない。自分が手放しても、周りは携帯したままだ。

手放さなくてはならないのは、端末ではなくて世間なのだが、自ら安定庇護の装置を手放すのは勇気の要ることだし、実際問題として、今さら急にそんなことをすると、たちどころに自我人格の損傷が起こりかねないだろう。

ヒントは、やりたくもないこと、にある。

抑圧に関わることだから、欲望は、昼に考えてもよくわからないだろう。欲望については、夜に考えることだ。

その点、夜というのは不思議だ。

「不可解さの恐怖」として、自己の死があり、自己の死が抑圧されているから、人間は夜に幽霊のモチーフを見つめる。

昼間には幽霊のことでずっかり忘れているものだ。

昼間に幽霊を怖がることのできないように、欲望も、昼間には考えることができない。見つけることもできない。

決定的なチャンスがあつて……

\*\*\*

僕は欲望において生きたいのだ。

今、昼間なのに、そのことがはつきりわかる。

僕ほどの人間になれば、そりゃあそういうものだ。

僕は、欲望というのは、必ずしも汚らしいものではないし、必ずしも邪悪

なものではないと感じている。

こうして書き話すことさえ、欲望において書き進める、ということができ

る。欲望と関係なしに出来のよいものを作っても、何の意味もないのだ。

時間の無駄をするのはいやだ。

世間的なこととか、世間性の機能とその功績のこととか、わかるけれども……

誰もがご存知のように、世間というのは、人々が連帯し合つて、お互いの

時間を無駄にしている。

世間には、何も体験できるものがない。

誰だって、体験を持つている場合には、その体験は、世間に向けては説明不能の体験のはずだ。

欲望において生きていくことができる。

全ての時間を、体験にして生きていくことができるのだ。

全てのことを、体験として残し、生み落としていくこともできる。

ただし、欲望は危険物だ。

危険物だからこそ、安全対策が要る。

安全装置として、世間をカマせるか、そうでなければ、自ら危険物の取り扱いに、トチらないことだ。

鍛えられて、成熟して、十分に明瞭な意識で、危険物を自ら取り扱うことができるかということ。

鍛えられて、成熟していくためにも、体験が要る。段階的に体験を経ていることでは、人間は鍛えられない。

世間的なごあいさつは、できなくてはならないが、それは安全装置の取り扱いにすぎず、エネルギー源の取り扱いではない。

誰も本当にはそんなことはしたくないし、そんなところにいつまでも時間を費やしたくないのだ。

今や、体験が少なすぎて、危険物の取り扱いどころか、世間的なごあいさつさえもできない人がたくさんいる。

世間的なごあいさつは、ゴリゴリにできなくてはだめだ。

世間的なごあいさつが、ゴリゴリにできないような未熟者は、危険物どころではなく、単なる危険人物だ。

危険人物をよるこぶ人は誰もいない。ただの迷惑に決まっている。

危険人物など、野放しの自由にできるわけがないので、入念に抑圧をほど

こすししようがないではないか。

決定的なチャンスが与えられたとき、欲望が首をもたげる。

決定的なチャンス、つまり、「二人きり」というような状態。

世間から一時的に離脱した状態だ。

安全装置のはたらきが薄弱になっている。

危険物を自己運用できない者は、この途端、危険人物の実体を現し始める。

一時期流行した、今もなお増殖している「草食系男子」のようなものは、

つまり抑圧の程度が強烈だという存在なので、決定的なチャンス、を目の前にすると、もう制御が利かなくなる。

昼間ではなく、夜の話だ。

現状、そういった事件がさしあたり少数で済んでいるのは、世間が潜在意識にまで強力に入り込むことに成功しているからだ。

とはいえ、事件の実数を、これで少数と呼んでいいのかは定かではないが、女性は特に、防犯意識を持たねばならない。

加えて、何より、事件を抑制しているのは、危険人物に「権力」を与えないよう、分散装置がうまくはたらいっているからだ。

権力の分散装置は、第一に民主主義だ。歴史資料がレポートするように、独裁は権力の集中によって、一個人に、決定的なチャンス、を与えてしまう。

そうなると、制御が利かず、とんでもない悲惨さのシーンが出現するのだ。現在でも、分散装置が行き届いていないところはある。たとえば、親が幼

子に対して、実際に何をしているのかは、外部にはわからない。

親は子に対して、何をどうするにせよ、決定的なチャンスを与えられていることになる。親は小規模ながら権力状態にある。それで実際に、悲惨なことになっているケースも少なからずある。

決定的なチャンスに、欲望が首をもたげる。たとえば親の欲望が、動機のない、迫害に向かうとき、子はその欲望の餌食にされる。人間的に鍛えられてきていない親は制御が利かない。それで事件になると、周辺世間からは

「まるでそんな人には見えなかった」と意外さへの声が上がります。

一方で、世間や権力の分散装置が隔々まで行き届いた場合、副作用としてのデメリットも被る。つまり、子は親から体験を得られない。子は親の欲望

の餌食にならなくて済む分、親から与えられる体験が得られなくなるのだ。

一昔前、学校の教師が女子生徒にセクハラするということが当然のようにあった。身体検査まがい、強制わいせつに近いことをするということがい

ど場合は慣れっこだった。慣れっこで、その気色悪さに耐えていた。

今は、昔ほど、そういったセクハラは横行していかないだろう。時代のムードもあるし、何より中高生といえども広く世間に通報できる端末を手に入れているからだ。

これによって、女子生徒は教師の欲望の餌食にならず済むようになったが、同時に、若い人間を教育したい、という、欲望によって教育される、ことの機会を失った。教師によって教育されるという「体験」を得られなくなった。

同様のことが全域にある。歌手は欲望において歌わなくなり、画家は欲望において描かなくなり、ダンサーは欲望において踊らなくなった。男は欲望において女を抱かなくなり、友人は欲望において語らなくなった。

それぞれが、個人の権利において、欲求に耽るばかりになった。

それはまったく安全なことだ。ただし、何の体験も得られない。その、欲望に無縁で安全な、何の体験も得られない欲求への耽り合いについて、僕はありていに、時間の無駄、と感じている。

そういったことは、全くの関係なしに、僕は欲望において生きたいのだ。僕にとつて生きることは、体験そのものを指すから。

現在、体験といっても、ほとんどの人が、体験を与えられただけでペシヤンコになってしまふ、そして自我人格を損傷しかねない、という実情がある。人間的に鍛えられる体験をほとんど経てきていないのだから当然だ。

現在、誰もが欲望に興味を持つが、自ら乞うてその実物にまみえると、たちまち後ずさりして世間へ遁走する、という状態にある。失礼極まりない状態だ。そのことが失礼にあたるという自覚もないが、結局、何が失礼で何が

節度に悖（もと）るかを、体験で得てきていないのでやむを得ないのだろう。

一昔前なら誰もが掛け値なしで「人間のクズ」とそれと呼んだ。許しがたいことだと。現代では何の躊躇もなく横行している。

それが実情だが、そういった実情も、僕を今さら感わしたりはしない。何であれ、僕は欲望において生きたいのだ。他人のことはあまり関係がない。今は昼間にも関わらず、そのことがはっきりわかる。

\*\*\*

欲望は危険物だ。

しかし実は、欲望は、不純物がゼロなら、危険物でありながら、有害ではないのだ。

なぜなら、不純物ゼロの、純粹欲望が爆発するとき、その爆発には音がなく、人の一切を傷つけないからだ。

光り輝く爆発だけがあつて、人を傷つけない。

そのとき欲望は純粹なエネルギー源であり続ける。

欲望が人を傷つけるとき、その損傷は、実は欲望そのものによって起こっているのではない。

欲望に混入した不純物によって傷つけられるのだ。

不純物が一滴でも混入したとき、欲望は汚らしく変質し、騒がしい轟音を立てて爆裂するものになる。

この、不純物が混入した欲望のことを、コンプレックスという。

コンプレックスは人に「執着」を持たせる。

この、「執着」になり果てた欲望は、すでに純粹な欲望ではない。

コンプレックスと執着が爆裂し、人を襲うとき、それは人を脅かし、人を傷つける。

コンプレックスと執着の人間は、必死の面相になっているだろう。

欲望のままにあれば、その人間は、心の底から笑っている。

女性の心には、男性に襲われたい、という欲望が潜んでいるだろう。

ただしそれは、不純物ゼロの、純粹欲望において襲われたい、という厳密な但し書きがつく。

純粹欲望において襲われたとき、そこには傷つきようのない、性愛の「体験」が得られる。

その「体験」が得たいのは当然だし、懂れて正当なものだ。

同時に、誰を「体験」したことにものならない、欲求解消的なセックスばかりを繰り返していくと、内心が疲弊していくというのも、やはり正当なことだ。

男性の、あくまで純粹欲望において、襲われたいという女性の欲望は、間違っていないが、現実的には、そういったことの実現は、きわめてまれだと言わざるを得ない。

防犯を甘く、油断したとしても、そのときつけこんでくるのは、決まってコンプレックスと執着の男に違いない。

コンプレックスと執着の男に襲われると、女性は深く傷つく。よって、これが刑法において重罪とされているのも当然のことだ。

危険物の取り扱いを自らできるか、というのはこのことだ。

世間において、欲望は抑圧されている。

その抑圧の海底から、欲望を引き上げてくるとき、抑圧の不純物がわずかも混入してはならないのだ。

不純物が混入した刹那、欲望はすでに汚らしく呼吸するコンプレックスに成り果てている。

危険物の取り扱いに未熟な人間は、欲望というものを、「ドロドロしているもの」と思っているだろう。

とんだ勘違いで、それは欲望に抑圧の不純物が混入しているからに過ぎない。

抑圧されていない純粹欲望が、なぜドロドロしているはずがあるだろう？

欲望は、動機さえ必要としない、すっきりとした単体のエネルギー源だ。

欲望とは何なのだろう。

それは誰にもわからないことだ。

誰にもわからないまま、ただその取り扱いに優れ、不純物を混入させなければ、欲望において生きる、ということとはできる。

エネルギー源に直結したまま生きていくことができるのだ。

欲望のまま、全てを営むことができ、全てを体験にしてゆくことができる。

人間にとつての、自己の死や、暴力、迫害、殺害、そういったところには、不可解さへの恐怖がある。

自我人格が、この恐怖に打ち克てない場合、欲望を取り扱うにしても、必ずその手元が狂う。

不可解さへの恐怖を、良しとできない場合、必ず欲望には不純物が混入するだろう。

それで、世間は、そういった不可解さの一切切切を、抑圧しておこうとする。

抑圧の海から、不純物なしで欲望を引き上げてくるなど、現実的に考えて不可能だと、世間の言う立場には説得力がある。

恐怖に対して素直だ。自己の死、その不可解さへの恐怖に、抗しえるわけがないということから、一切切切の抑圧を選択している。

それは、一部の不誠実な徒に比べると、まっとうなことかもしれない。人間的に脆弱なくせに、欲望や体験といったことに、ふしだらな興味だけ

持つ、失礼極まる徒に比べれば、穏やかな世間の徒は、決して醜悪ではない。ただ、それでも僕は、欲望において生きてゆきたい。

欲望も、自己の死も、その他全てのこと、抑圧せず野ざらしにして、不可解さの恐怖に包まれて生きてゆきたい。

楽しいのにな、と、もう一度言っておきたくなるが、軽薄か。

頭上、墨汁のような雷雲に紫色の稲光がある。

地上に降りてきた電磁波オーロラと、見たこともない悪霊と鳥獣の戯画が、風に重なってひしめいていく。

臨界を超えてなお濃厚に、景色は圧迫を増し続ける。

目を細めて……この野原の先は何億キロメートルあるのだろうか？

手元には銀色のハンドガンと、目の前には這いつくばった、毒針を持つ一人の老婆。

不可解さの野原で、銃声、スキップ歩きをする。

僕は心の底から笑っていたい。

「欲望／了」

## (欲望 2)

さてそれで、だ。

僕は欲望において生きたい。

これは、間違いないし、有為で有用な方針だ。

この方針だけで、たちどころに見えてくるものもある。

これはこれで問題ないが、実際のこととして、いくら欲望だからって、南青山で見かける女性の全員にいきなり飛び掛かって暮らすわけにはいかない。

それは、僕が権力状態にないからだ。

じゃあどうすればいい？

いやあ、こういうことを考えているとき、楽しいなあ……

「二人きり」ということには重要なヒントがある。

「二人きり」、つまり、「あの人はもういないよ」というようなこと。

世間からの離脱だ。

漠然とした不満がある。

(この話はきつと僕自身にしかわからないが、我慢してくれ)

漠然とした不満、つまり、欲望を抑圧した世間状態が、今徹底的にあるのが気に食わない。

昼間はしようがないのかもしれない、とも思うが、それにしたって、エネルギー源に惹かれるところはないのか、と不満だ。

エネルギー源なしに活動的であり続けるには、きつと意識的な努力が膨大に必要なはずで、とてつもなくしんどいはずだ。

そのしんどいことを、意地で続けるなよ、と思うが、まあ他人のすることだし、しようがないのかもしれない。

とりあえず、僕は権力状態にないので、代官山を歩く全女性にいきなり襲い掛かることはできない。

そんな権力状態に、なりたくないのかと言われれば、なりたくないわけはもちろんないが、それは何かちよつと違う。

どんな社会的な権力も、そこまでの権力は与えてくれないし……

そうか、社会的な権力も、暴力的な権力も、そこまで完全な権力を与えてくれるわけではないのだ。

それが気に食わないのだ。しよせん、頭打ちである権力が。

女性に拳銃を突きつけて強姦しても、それはつまり単に「無理やり」でしかないのであって、暴力的な権力などでは、女性の本心や素直さまで権能を行使はできない。

だから今いち、つまらないのだ。

権力というなら、もつと完全な、超能力のような権力がないと、面白いな

い。

(超能力による完全権力というのは、なかなかいいモチーフだ)

そもそも、女性に拳銃を突きつけるなんて、権力がなければ暴力の器具にすがっているにすぎない。真の権力を持つていれば銃なんて要らないはずだ。結局、「あなたになら殺されてもいいの」と言ってもらえる恋人以上には、

真の権力なんか持ちようがない。

僕が「殺す」と言えば、自らその細い首を差し出してくるのだから。

話が逸れた。

とにかくだ。

欲望において生きたいということ、これは間違っていない。が、この世界は、ピカソのゲルニカのような世界ではないので、やり方を工夫し、磨き上げる必要がある。

十九年前のようにだ。

いやあ、楽しくなってきたねえ。

やり方を工夫するといっても、それは「方法」になってしまっただけではない。

方法を作り、それを持つことは簡単だが、実際にはそれを使えるシーンは一度も来ない。

鍵穴を無視して鍵だけを作ってみました、というような愚行だ。

必要なのは、方法じゃなくて「術」だ。

鍵を開きたいなら、鍵開けの「術」を身につけるしかない。

鍵開けの術を身につけるには、まず、今世間にどういったタイプの鍵が流通しているのかに詳しくなると……

そうそう、漠然とした不満があるのだ。

あくまで、その前提の上で。

その前提の上で、何であれ、通用する自分、でなくてはならない。

自分は、いついかなるときも、通用する自分でなくてはならないし、逆に言えば、通用してしまえば他のことはどうでもいいのだ。

通用する、というべきところに、むろん、迎合する、というようなやり方を持つてきてはならない。迎合は、表面上がなじんで見えるだけで、自分の通用度はゼロだ。

通用する、という次元のところで、欲望において生きる、営む、ということが為されねばだめだ。

ボクシングのリングに裸拳で上がったら、その時点で反則負けの退場になる。そうなると、どんな必殺パンチも通用以前の役立たずになる。

当たり前だが、自分が通用するというのはうれいことだ。

何の説明にもなっていないが、自分が通用するということは、相手に背後の間を見ない、ということだ。

つまり、「二人きり」というやつ。

今、この、「二人きり」ができる人は少ないように思う。

「二人きり」ができない場合、それは自立していないのだ。

背後に世間がくっついてきているのだから、自立できているわけがない。

自分が人に通用するということは、相手にも、自立した自己としての通用を強いる、ということでもある。

これが、良いわけだ。

最近の若年層は、ずっと身内世間の群れで過ごしているように見える。

一方、一人で行くときは、極限まで閉鎖的だ。

世の中が物騒だからしょうがない。

とはいえ、事実上、「世間の群れ」と「一人の閉鎖」を、えんえん往復しているように見える。

自分単独で、同じく単独の誰かに出会うということが、もはや皆無なのではないか、などと危惧されてしまう。リアルに考えて。

一生、そういったことなしに行く時代なのかもしれない。

物騒な世の中だからしょうがない。僕だって、女性には、「危ない無理はしてはいけない」と、いつも論じたくなるからには。

不自由な時代だな……

ともかく、現実的な困難はさておき、「二人きり」は良いものだ。良いものといえは、結局そこにはいかないのかもしれない。

「あの人はもういないよ」というとき、初めて人は人と向き合うことができる。

「あの人」とは、代表的にはお母さんだ。

「そうか、お母さんは元気だけど、お母さんはもういないんだ」と気づい

たとき、初めてオルタナティブ・ロックの音楽が、良いものとして響き、聞こえてくる。

就職して、何かの業界に入り込むと、業界世間が背後にくつついた人間になつてしまいがちで、そうなるともう、誰とも二人きりにはなれなくなる。誰とも出会えなくなる。

「業界」のほうは、別に自分を大切に思ってくれるわけではないのにだ。いわゆる共同体とか、世間への、甘えであり、依存だ。

そうなるともう、自分は、ギョーカイ的にしか通用しなくなる。それで、じわじわ、絶望に嵌まっていく人は多い。

ギョーカイの身内感とか、世間感って、そんなに良いものだろうか？ 僕にはどうもピンとこない。

僕はたぶん、一生、何のギョーカイにも居心地を覚えずに生きるだろう。身分だからしょうがないが、それなりに厄介なことだ。

(場所移動)

あれ、これはまずいぞ。

さつき、所用で渋谷を歩いていたのだが、とんでもないことに気づいてしまった。

ここ数年の違和感はこれだったのか。たぶん、震災以降ぐらいに起こってきたことだ。

渋谷だから、たくさん人がいるのだが、そこには「人」が歩いているのではなかった。

「身分」が歩いていた。

それぞれの所属するギョーカイを、「身分」として歩いているのだ。

これはとんでもないことだぞ。

美容師は、「美容師です」という身分で歩いていた。

飲食店のスタッフは、「飲食店です」という身分で歩いていた。

雑貨店の店長は、「雑貨店の店長です」という身分で歩いていた。

芸能関係のADは、「芸能関係のADです」という身分で歩いていた。

IT系のサラリーマンは、「IT系のサラリーマンです」という身分で歩いていた。

仕事熱心、ということもあるのだろう。

が、見る限り、全員がそうして歩いており、誰一人自分の顔で歩いていないというのにはさすがにヘンだ。

在りし日のコンスタンチノープルの光景は決してこのようではなかったは

ずだ。

少し脱線するが、合わせて面白いことに気づいた。

「選ぶ」という瞬間には、人間の一種の隙というか、無邪気さがあるのかもしれない。

スーパーマーケットに立ち寄ったのだが、スーパーマーケットで生鮮品の商品を選んでいるとき、そのときはなぜか、多くの人が「自分の顔」をしていた。

不思議だ。

やはり欲望と関係があるのだろうか。

自分の食べるものを選んでいう、原始的な欲望が、人を世間身分から引きはがし、一時だけその人自身に還らせるのかもしれない。

なるほど、人類が食事を文化にした理由、また、特に用件がなくても、人が外食をしに行きたくなる理由は、この「選ぶ」という時間の中に、自身に還れる瞬間があるからかもしれない。

証券会社の人間も、警察官も、土方の肉体労働者も、コンビニエンスストアで昼食のカップラーメンを選んでいるときは、無邪気で真剣だ。僕はその光景が好きで、あの光景だけは、誰であっても邪魔されてはならない、と感じる。

自動販売機でジュースを買うとき、どのボタンを押すか、人が選んでいる瞬間もたまに好きだ。どれだけ憎たらしいジジイがそれをやっていたとしても、その瞬間だけは、決して邪魔してはならないと感じる。

僕は人が世間身分から離脱する瞬間がたまに好きなのだろう。

もうひとつ、今日は気づいたというか、改めて思い出すことがあった。

話が散り散りで申し訳ないが、我慢してくれ。

僕は、幸運なことに、ストレスに強いからだ。

ある種のストレスに晒されることが、むしろ好きだ、というところがある。

根性はないのだが、タフなのである。

ストレスに耐えるという言い方があると思うが、僕は、それに耐えろと言われると、根性がないのでまるで耐えられない。

が、ある種のストレスについては、別に耐えなくても、「割と好きなんです」というところがあるのだ。

それで、人がグツタリする環境の中でも、むしろいきいきしてくる、というところがある。

たとえば満員電車のストレスなどがそれだ。



暑苦しさや、息苦しさがあり、人々が死んだ魚の目のようになっていく環境が、割と好きだ。

僕はなぜか、そういうタイプのストレスには、抜群に強いのだ。ただし、女性を連れてくるようなときはだめだ。連れてくる女性がグツタリしていくのを見ると、そのせいで僕もグツタリしてしまう。

男同士でいるときや、自分一人でいるときは、そういうタイプのストレスは、むしろ「はいはい」と自らもぐりこんでいきたいくなる。

これは僕の、特殊な性質かもしれないが、そうしたストレス環境下においてこそ、人とつながりうる場所があるように感じる。

これこそ、工夫するべきやり方の一つかもしれない、と、目をつけている。人とつながるためには、互いのストレスレベルを揃えることだ。ストレスレベルを同調させる。

それで、感覚的に、「お互いに話が通じ合いうる」という直感が得られてくるところがある。

イメージとして、田舎から来たオノボリさんが、「東京モンは冷たい」とショックを受けるとい話があるが、それはきつと、田舎から旅行で来られた人と、東京在住の人間とは、それぞれの所属するストレスレベルが異なるのだ。会社員ならよくある話、東京本社と大阪支社とは、話のリズムもテンポも噛み合わない、通じない、ということがある。それもきつと、それぞれのストレスレベルが違うのだ。

きつと、相手のストレスレベルに同調することが、相手にとつて、「話のわかる人」になる第一の方法だと思う。東京の証券会社の人間と僻地の商工会議所の人間とは、互いのストレスレベルが違うはずだ。毎朝五時に起きて外国語を含めた新聞を五誌読むのが日常の人間の、そのストレスレベルに同調するのは容易なことではない。

ただし、ここでいうストレスレベルの同調というのは、観念的なものではなく、あくまで実際に心身に課されているところのストレスレベルの話だ。相手のストレスレベルに同情したつて、話を通じ合ったりはしない。

ひよっとすると、就職面接なども、第一には、「彼はわが社の業務におけるストレスレベルに適合しうるだろうか？」というようなところを、直観的に見ているのかもしれない。少なくとも、総合商社にホンワカした女子大生が面接に来たら完全なお間違いだ。実際にそういう人も面接に来る。そのときは、面接の内容以前に、まず互いに話を通じないものだ。

鍵と鍵穴の話をした。そして、自分というものは常に「通用する自分」で

なくてはならないと話した。その、通用する、という部分に向けて考えている。もし、あらゆる相手と場面に応じて、ストレスレベルを同調させることができれば、それは鍵穴を開く術となる。

もちろん、同じストレスレベルにあれたとしても、そのとき自分がグツタリしてはだめだ。むしろ、同じストレスレベルにながら、こちらはいきいきしていないといけない。同じストレスレベルにながら、なおいきいきしている人がいれば、その人は希望であり、魅力的だ。

このことについて、僕は幸運にも、ある種のストレスに強いたちだから、その生来の性質を、有利に使うことができる。

この、ストレスレベルについての話は、まだ僕自身としても仮説だが、これが射的を射ていけば、すばらしいことだ。これまで考えもしなかった発想だ。自分にストレスが、無い、というのではだめなのだ。「ちよつとストレスでも買っていくか」というところが無いといけない。

そしてそういったことに、僕は心当たりがないでもない。僕はストレスが人を輝かせるものだと思うし、そういう経験が十分にある。

ストレス愛好者、であつてよいのだ。

人は漠然と、「人は心があるほうがいい」と捉えているだろう。そのように思い込まされているのかもしれない。が、ストレスレベルの程度によつては、心があまり無いほうがよいこともある。ストレスレベルの程度によつては、「心ある」というようなことは、しばしば場違いなのだ。自分の「心ある」振る舞いがどこにでも通用すると思つていたら、それは甘い話だ。もちろん最後まで心が無のままではどうにもならないが、少なくとも、まずは鍵が鍵穴に入ることがなければ、鍵が開くことは決してないのだから。

そういえば、新宿などに行くと、とんでもない軽薄さでナンパをしているナンパ師がいるが、あれも経験上、ある種の女の子のストレスレベルに適合するために、ああいう調子のほうがよいのかもしれない。事実、あれで実績を上げているから、ああいうやり方になるのだろう。

ストレスレベルの同調という発想。これを「通用」の糸口にする。我ながらいいideaだし、僕はストレスに強いたちでまったく幸運だった。

(ここまで書き話すのに、自分自身、なるほど、なるほどなあ、とつぶやきまくつてしまった)

話を戻そう。

僕は欲望において生きたい、という話だった。

それで、僕は欲望そのものを、いいかげん純粹に取り扱えるようになって

いると自分自身感じているが、それがそのまま「通用」するかというと、そうはいかない、という話だった。

世間は何も芸術的ではないからだ。

世間の様相は、今や、多くの人が自分の顔ではなく「身分」の顔で歩く、というような様相だ。

単純にいつて、気持ちも実情も「忙しい」のだろう。

それならそれで、そこに通用していくようではなくてはならない。

むしろそれは、様相に迎合するというのではなくて。

警戒されていたら、人を殺せない。

だから、「弱く入るべきか？」と、色々なことを考える。

弱く入る、という発想は悪くないが、そう単純なものでもないだろう。

「術」だ。方法になってしまつてはいけない。

何を目指すべきかといえば、まず、「二人きり」を目指すべきだ。「二人きり」ができたなら、あとはどうとでもなる。

いやあ、現実的だな。

僕はよく、「流れ系」の話をする。動静系では人は衝突してしまう。

それで、肝心なのは、流れ系は人間にとつて快樂なのだから、相手こそが

その流れ系に入つてしまわなくてはならないということだ。

僕だけが流れ系に達者であっても意味がない。

むしろ、僕自身が、流れ系を十分に使いこなせることが大前提としてだ。

今、万年筆の先を「鼻セレブ」で拭いたのだが、ティッシュペーパーに

「鼻セレブ」とは、いつ見てもすばらしいネーミングだと思う。

このネーミングだつて一つの糸口に違いない。「鼻セレブ」というわかり

やすさと手短さで、購入者のサイフの鍵を開けることに成功しているのだ。

人々が忙しくしているところに、「通用」させるのに、現実的でよい訴え

かけ方をしている。

「二人きり」の現成へ至らしめるのが、さしあたり僕の方針だ。

それを、難しくしてしまつても意味がないので、シンプルに、ストレスレ

ベルの同調、というやり方で狙つていく。

相手が流れ系の端緒を踏むこと。踏ませるよう導くこと。

そこは条件反射的になつていなくてはだめだ。数および量をしつこくこ

なしてからだ。

ストレス愛好者であり続けるほうがいい。熱心な。

まずは卓球から始めればよいのだ。いきなり日本刀を抜いたら逃げられて

しまうから。

逃げられてしまったら、いかな剣術も役に立たない。

そんな殺し屋は二流だ。

有能な殺し屋は、剣術に長けねばならないが、それは最終局面の話に過ぎない。

そもそも最終局面へ到達できない場合はどうするんだよ、ということを実

際的に考えねばならない。

思えば、ここ長い間、最終局面で使える術を研究してきたのだった。

最終局面で使えるものがないと、それはそれで、最終局面まで行つても意

味がない、ということになるからには。

それで、だ。

そのことはさておき、現実的には、まずは卓球なのだ。卓球なら逃げられ

ずに済む。

そこから、卓球で「二人きり」になり、「二人きり」になつてから、日本

刀を抜けばいい。

そうしたら、「二人きり」だから、相手も自前の剣を抜くしなくなる。

そこまで全てを、流れの中に取り込んで、初めて現実的に「通用」する術

と言えるだろう。

ストレスレベルの程度によって、人の感覚は卓球になるのだ。

コツンカツンと、小気味のよい感触。

「わかる」と受け取られる。

話を通じるといふ状態だ。

湿つてベトベトしていたり、玉が重かつたりしたら、卓球にならない。

「心ある」という状態でなくていい。

卓球のコツンカツンに心なんかない。

日本刀を抜くには、心があつてしまふけれども、それは「二人きり」に

なつてからだ。

卓球台の前に、日本刀を抜いて現れたら、心はあるのかもしれないが、渾

身のアホウだ。

覚えやすいように、卓球的世間、と呼ぶことにしよう。

ピンポン玉がコツンカツン跳ねるのはなぜか。ピンポン玉が、中空で、軽

く、その外殻が硬いからだ。硬くて乾いているからだ。

小気味がよい。

ストレスレベルによって、人間の心も、中空、軽くなり、外殻が硬く乾い

て、小気味よくなるのだ。

だから、卓球的世間が成立する。

僕がストレス愛好者というのもそこだ。

中空にして、外殻を硬く、カラッと、小気味よくするのが、わりと得意なのだ。趣味としても、とてもいいと感じている。

そして言わずもがな、まったく逆のこともある。

夜の浜辺に、それぞれが日本刀を抜いて、殺し合いをするというところに、卓球スマイルで割り込んできたら、それだってやはり渾身のアハウだということだ。

お前にはできないことだから、すっこんでな、ということになる。

だいたいまとまってきたかな？

僕以外の人にはまったくわからないような内容で、またそういう書き方で、ごめんなさい。

でもまあ、本当の本当に、わけのわからない話というのでもないはずで：

僕は欲望において生きたい。このことは、何度繰り返しても、自分で気分

がいい。

欲望のことしか考えないし、他のことを考えるのは、あまり意味がない。

欲望のままであれたいいが、それが「通用」する形でなければ、面白くもなんともないので、工夫が必要だ。

ストレスレベルを同調させるというやり方。

まずは、話がわかる、話を通じる、という直感を交換すること。

卓球的世間だ。

コツンカツンと跳ねて玉が飛んできたら、「卓球ね」と、これは誰でもわかるのだ。

そこから、相手の側にこそ、流れ系へ入り込む端緒を踏ませる。

流れ系は、それ自身が快樂だから、端緒を踏んでしまえば、そこから「二人きり」の現成へ接近してゆける。

ストレス愛好者として、中空になり、軽くなり、外殻を硬く乾かして、コツンカツンと、小気味よく。

卓球で、打ち損ねをしても、誰も傷つかないし、怖くない。平和なものだ。それが交友というものだ。

交友の、方法、なんて、疲れることは考えない。

いいねえ、現実的で。

そして、僕だって昔は、そういうコツンカツンのやり方を、誰より能動的に使っていたのだ。

十九年前のことだ。

今さら、それを取り出して使うのに、苦勞なんてしないだろう。

昔取った杵柄というやつだ。数と量は、そのときにさんざんこなしたのだったな。

あのときも、考えてみれば、確かに欲望のままだった。

あのときと今とで、何が違うか。

僕には深刻に技術が必要だったのだ。

だからこしばらくは、自前のやり方を封印してきた。

f 式がどうたらこうたらという、バカみたいな話をどこかでしたと思う。

まあ、そのバカみたいな技術の獲得が、必要だったので、これまで顔を伏してきたのだ。

ようやく、その用事は済んだ。

ようやく、改めて、再び欲望のままに生きていくことができるな……

ピンポン玉は、外殻ですよ、外殻。

最後にもう一度確認する。

欲望は抑圧されている。

不可解で、危険で、怖いものだから、世間はそれを抑圧している。

「体験」を失うことを代償にしただ。

怖いからこそ抑圧をしている。

だから、欲望もそうだし、「体験」そのものも、それ自身が怖いものだ。

自己の死の体験は怖いし、それだけでなく、暴力や迫害や殺人など、体験となつたらとてつもなく怖い。

抑圧していた「不可解さ」が噴き上げてきて怖い。

怖いが、エネルギーに満ちている。

このエネルギーに、コンプレックスの不純物さえ混じらなければ、人はエネルギーと共に、体験を積み重ねて生きていくことができる。

怖いといえは、出会いだって怖いし、恋だって怖いし、愛だって怖い。それが体験となるとき、全ては不可解なので、不可解さが怖い。

自分が、この世界で、生きている、ということが体験されたら、立って

られなくなるぐらい怖いんじゃないか。

それでも、案外、倒れない人は倒れない。

それは、自立している、ということだ。

人間は結局、欲望と体験の渦中に、自立するか、もしくはパニックになるか、その二者択一しかできないのかもしれない。

欲望には、当然それが向けられるべき対象がある。

欲望は何に向けられるか。

自立していない人間は、欲望の対象にならない。

自立していない人間は、欲望の対象にならないから、欲求の対象にされるだろう。

そうなると、当然、住む世界が違ってくる。

体験がないのに、わずらわしい、という世界だ。

体験がないのに、求められるし、自分も求めてしまう、という世界だ。

欲望でなく、欲求の対象……そちらのロマンも、わからなくはないのだが、残念なことに、僕は欲求不満などつづくの昔に使い果たしてしまった。

それで僕は、やむを得ず、欲望において生きるしかない。

「（欲望2）／了」

## 響け

声は響く。

どこに響く？

自分（たち）の声が、狭く押し込められることを求める人間などいない。

自分（たち）の声は、高らかに無限に響いてほしい。

声が無限に響くとはどういうことか。

物理的な空間や、実生活の環境の中には、無限はない。

その意味で言えば、無限なんてどこにもないのだが、もし本当に無限がどこにもないのであれば、そもそも人間は無限という概念を発見できなかったはずだ。

無限の反対は有限だが、有限の中を探し回ったって、無限が見つかるわけがない。

有限です、と初めから書いてあるのだから。

そういった間違いをしなければ、自分（たち）の声が、無限のどこかへ響くということは、体験の上でありうる。

そんなはずは、と言いたい人には、そう言わせてあげればいいじゃないか。われわれの声が、ふつう無限に響いたりしないのは、われわれが有限の空間にこだわっているからだ。

有限の空間について話し、有限の空間に向けて話しているから、声は有限の空間に消費される。

かといってもちろん、無限の宇宙にイメージを湧かせるというような、メルヘンチックなことを勧めているのではない。

あるのだ、体験上の、ひとつの「無限」というやつは。

感覚上のことなので、説明したところでおぼろげではない。

体験したとき、「あれっ」と感じる、「今は……」と感じる、そのことからしか始まらない。

実際に、自分の声が、無限のどこかへ響いていく感触を、直接得るときがある。

そのとき、自分でも「あれっ」と感じる。「あれっ」と感じ続ける。

「まあいいや」とも感じ続けるのだが……

この声は、どこへ響いているんだ？ という、謎の感触だ。

もちろん、音というのは、空気（媒質）の振動であり、熱力学的に有限の物理現象なので、音が無限に響くというとはありえない。

われわれは、「声」を物理的な音として聞いているのではない。キング牧師の演説だって、それを「音」として見れば、新宿駅のホームで流れる乗車アナウンスと大差ない。

音というと、オシロスコープでその波形を視覚化することができるが、そういう音のデータを見てどうこうという話ではない。

音ではなく「声」の話だ。

「声」が、どこか無限のところへ響いていってしまう。

それが起こると、そのこと自体がなぜかわからないがよるこびになる。

誰だって、自分（たち）の声が、有限の空間に押し込められたいのではないからだ。

自分（たち）の声は無限に響いていってほしいから。

声はもちろん、日常の、業務上の連絡などにも使ったりする。

「今日中に銀行に信用状の発行を依頼しといて」というように。

「はい」とやるのだが、これはあくまで用事を済ませるために、声を道具に使っているのであって、そういうことが人間にとつてよるこびしいということでは本当はない。

音といえば、楽器などは音を出す道具だが、楽器もやはり、無限のどこかへ響く「声」を生み出すための道具として、本来はある。

もしそうでなかったら、アンティークのバイオリンに何億円なんて値段はつかない。

もし、楽器が声でなく「音」を出すものだったら、わざわざ反響の仕組みを具えて、単純に言って「音がうるさい」というだけの品物になるはずだ。

声でなく「音」を出し、それで用事を済ませようとする道具は、たとえばサイレンだ。

サイレンがウーウー鳴って、緊急事態ですよ、対応してください、という連絡の用事を済ませている。

電話の着信音だってそうだ。

人間の喉からは、「声」が出るから人間なのであって、もし喉からウーとかピーとか「音」が出るような人間だったら、うるさくてかなわない。

無限のどこかへ響く、と行って、無限とはどこか？ という、たとえばフィクション世界などがそうだ。

人間の生みださうるフィクション世界は、それこそ無限にある。

無限の種類も作り出せるし、無限の奥行きを創り出すこともできる。

寝ている間、どれだけの種類の夢を見られるか、ということも無限だろう。紙の上にX軸とY軸を書いただけでも、それは「無限」だ。X軸にもY軸にも端っこはないのだから、XY平面は無限の広さを持っている。

人間は、そうして容易に、想像力の中に「無限」を創り出すことができる。そして、「声」というのは、「音」とは違う、きわめて人間的なものだ。

だからこそ、「声」は、ある種のやり方をする、そのXY平面やXYZ空間といったような、人間が創り出す無限のどこかへ、響いていってしまう。そういう声の響き方があるのだ。

テクニクなんかないし、方法もなければ、心構えもない。

そんなものは、いわば「夢の見方を教えて」というようなもので、教えられずがない。教えなくても人間は勝手に寝ている間に夢を見る。

子供だって、何も教わらなくても、想像力の世界を膨らまして遊ぶということ勝手にする。教わらなくても知っているし、教えると言われても教え方は存在しない。

フィクションも、夢も、数学も、もともと人間が生まれ持った感覚だ。

フィクションや、夢や、数学などに、無限は堂々と存在している。そちらに声が響いていってしまう、ということが、感覚上の事実としてある。

もちろん、そうしよつちゅう見かけるような現象ではない。

なぜ見かけることが少ないかというと、われわれが、この有限の実生活空間に、強いこだわりを持っているからだ。

こだわりを持っているなければ、それは一種の精神病なので、こだわりの持つているのが正常だ。

自我人格が鍛えられることなしに、こだわりだけが消失してしまつたら、単にこの有限の実生活空間が「わからない」「認知できない」ということになり、精神病になってしまう。

ただ、たとえば子供が、昼間にも夢見がちに、とつぜん聞いたことのない必殺技の名前を叫んでもおかしくない。

そしてそれは、想像力に生み出された、フィクション世界の中への声なので、その声は、無限のどこかへ響いていく感触があつてもおかしくない。

事実、フィクションを職業にする、たとえば俳優や舞台役者などは、フィクションの世界へ声を響かせるのが当たり前なのだし、一流や名人の声は、無限のフィクション世界のほうへ響いていっているのだ。

だからこそ、それは聴衆にも特別な声として聴きとられる。

だからこそ、そういった名人の声は、素人には真似できないし、プロでも天才のそれは真似できない。

名人の声は、単に音量がデカいのではなく、響いていく先が違うのだ。

こんなことを話していたって、何の足しにもならないかもしれない。

が、僕はこのことをここに書き残しておきたい。

実生活空間で、有限に生きていくのがわれわれだし、その有限空間に強いこだわりを持つのがわれわれだ。

一方で、紙の上へつちやらで数直線を書き、容易に無限を創り出してしまうのもわれわれだ。

どちらもわれわれの事実だ。

有限をやるし、無限もやるという、その二つともが、われわれにとってよく知られた、ありふれた事実だ。

どちらもわれわれの事実なのだから、どちらか一方を、特別だとか、特殊だとか、しやちほこばって捉えることはない。

自分(たち)の声が、高らかに無限に響いていつてほしい、というのは、神秘的なことではないし、メルヘンチックなことでもない。

われわれは、有限というジャンルもやるし、無限というジャンルもやるのだ。

その、無限というジャンルのほうに、声が響いていくことが、なぜか知らないがよろこばしいというだけのことだ。

声はもちろん、身体から生み出される。

ここに、重大な問題があるのだ。

有限の空間の中、われわれが、一番のこだわりを向けるのが、われわれの自分の身体に対してだからだ。

われわれは自己の身体と生命が有限であることに永遠のコンプレックスを覚えていてる。

いざ身体を使うとき、コンプレックスから、自分が無限だと開き直すことがどうしてもしにくい。

生命を承らえ、生命を繁栄させようとする、動物的個我としてはやむを得ないところだ。

動物的個我をしか重視しない人間がいたら、彼にとっては数学など、どれだけ便利か？ という用事もものしか見えないうら。

いざ身体を駆動して、声を出そうとするとき、身体には有限へのこだわり

が染みついている。

それで有限ジャンルに向けての声しか出ない。

無限に向けて響いていかない。

われわれはまた、こういったこともする。

有限の生命へのコンプレックスから、有限の身体の、「最大値」を誇ってみせようとするのだ。

それは、努力の末、大きな声をもたらすかもしれない。

しかし、有限に向けての声は、有限にしか響かず、その最大値を極めたとしても、それは有限でしかない。

われわれはそうして、しばしば、好きでもないことに憑りつかれている。われわれは、誰しも一度は、有限の生命と身体を、最大にまで押し広げて、コンプレックスを慰めようとするものだ。

人間の生命が若いうち、生命と身体は拡大する。その中で、有限の最大値は実際に更新されてゆき、コンプレックスはやや慰められる。

そうして、慰められる代償に、好きでもないければ、本当にはよろこばしくないことに、いつの間にか憑りつかれていく。

憑りつかれながら、誰もが心のどこかで、本当によろこばしい無限への到達を求めている。

われわれは実際、よくそうしているのだ。

速く走ろうとする者は、有限の最大値を追い求めながら……有限の最大値にしか興味がないように見える。

けれども心のどこかでは、有限の最大化に向かおうとするその誠実さこそが、やがて自分の走る姿を無限のどこかへ響かせてくれるだろうと、信じて走っているのだ。

どれだけ役に立たないにしても、僕はこのことを書き残しておきたい。

声が無限のどこかへ響いていくということは事実ある。

われわれは、有限をよくし、また無限もよくやる存在だからだ。

無限のどこかへ声が響いていくということは、やりようによっては、何も難しいことではない。

紙面に数直線を書くことのように、何も難しくない。

ただ、無限をよくやるわれわれにとっても、有限のコンプレックスをこびりつかせた、この自分自身の生命と身体を、無限のほうへ持ち込むのは難しいのだ。

だが言い換えれば、難しいのはその難しさだけだ。

われわれには、生きる意味があるし、生きる値打ちもあるし、しようもない努力や研究を、しつこくしてみる理由もある。  
 自分（たち）の声が、高らかに無限に響いていくことに、よろこばない人間なんていないからだ。

「響け／＼」

## 体温

まだ薄い彼女の肩に手を置いた。

肩は焼けるように熱かった。

彼女が泣いているからだ。

笑っているときもそうだった。

心が燃えているということ。

笑っているときも泣いているときも、怒っているときもよるこんでいるときも。

心が何かを受け止めて燃えている。

人間には、ただ笑っているだけ、というときもあるし、ただ泣いているだけ、というときもある。

それは単純な情緒だ。

単純な、気分というときもある。

心が燃えているときというのは違う。

何かを受け止めて、心が燃えている。

肩や腰に触れると、汗を掻いており、その熱と蒸気にびっくりする。

触れていて、正気がゆがむほど熱い。

心が燃えている人間の、体温だ。

男女が、性的に交合するときにも、それは起こる。

何かを受け止めて、心が燃えているとき、全身から蒸気のような汗が噴く。

手のひらに触れると、熱くて思わず手を引っ込めてしまいそうになるほどだ。

熱い蒸気に包まれている。

それで、切りつけるような火傷は負わない。

本当に大切なものへ向けての、よろこびや、悲しみが、怒涛となって押し寄せて、彼女の心を、堪え切れない発火点へと追い詰めてしまうのだ。

「友達ができたの」と泣いた女の子もいた。

新宿駅の構内で、涙目で、震えて、僕を見上げて、立ち尽くしていた。

「よかったな」と肩に触れると、燃えるような体温だ。

手が怯むほどだ。

こちらの胸が焼けて、こちらまで崩れ落ちてしまいそうなほどだ。もし、ワールドカップのサッカーで、決勝点のゴールが敵陣に突き刺さったら、市民らは歓喜の雄叫びを上げるだろう。

大爆発だ。そのとき、居並ぶ肩は、触れ合って、店内は蒸気に煙り、輝く体温で満たされるだろう。

そのことは、体温を冷やしたまま、企みによって大声を張り上げる連中とは性質を異にする。

歓喜と、盛り上げの工作は、違うものだ。

盛り上げの工作が、必ずしも悪いものではないにしても、どこまでもやはり違うものだ。

僕は体温を求めている。

燃えるような体温なしに、何かを表面上うまくやってみせたとして、そのことが自分の何になるろう？

あるいは燃えるような体温の子が、何かについて、ヘタクソにしかやれなかったとして、専門家でもないわれわれにとって、何の問題があるろう？

欺瞞の利かない体温のことまで、自分の見栄や、コンプレックスの隠匿に、曲げて捉えようというのか。

そんなことは誰も続けていられない。

燃える体温が交わされるとき、そこには必ず燃える眼差し、燃える声、燃える言葉と、包む人間の蒸気がある。

それ以上のことはないし、またこういった原初的なことを抜きにして、上等なふりをして何になるものか。

冷え切った体温の者を、過保護に温めてくれる赤外線じみた人間などこの世のどこにもありはしない。

燃える体温に生きるか、欺瞞の低体温を生き続けるか、そのどちらかだけだ。

頭に熱を上らせて、神経が切れかからんばかりになっている人間も、自分は熱に憑りつかれていると感じている。

それは錯覚だ。

その証拠に、頭熱に浮かされた人間の、その肩に触れようとする人間は現れない。

熱あるものに触れようとするのが人間の本能だから、触れたくもならないものは、つまり熱を帯びていないのだ。

ついでに、人間の正体は、笑いでなくても涙でもない。尊厳への怒りや勝利へのよろこびなどでもない。

正体は一貫して、その燃えるような体温だ。

僕は体温を求めている。

僕は一切のもっともらしい話を聞き流している。

地を這う一種の動物のように、僕の眼は、輪郭や造形を追うのではなく、

その物体の体温と蒸気を見つめている。

目に映るのは、燃えるような体温だ。

「体温／＼」



## 永遠の未来

計画を立てないとな……

不思議なものだ、人は計画を立ててこそ自由になれる。

同じ自由といって、たとえば禅寺の禅僧は、ずっと同じ寺で座禅を続けているだけに見える。

だがそれも、よくよく見ると、きちんと計画の上でのことなのだ。

つまり、生涯を通して、座禅一本でいく、その他のことは一切せずに死んでいく、という、計画の上での座禅なのだ。

計画を立てないとな。

もちろん、計画には、血が通っていないってはならない。

自分の生きる道そのものになるのだから。

「道」とはよく言ったもので、行先を決めなければ道は見えてこないし、行先を決めたって道を進まなければ進まない。

進み始めてしまえば、途中で頓死しようが、人はあまり文句を言わないものだ。

行先にも、道にも、これといって意味はない。

意味があつたらそれは道ではなく意味だ。

意味の上なんか歩けるか。

行先も道も、自分限りの欲望だ。

誰に説明する義理もない、小さなことだ。

未来はやはり、無限のものだ。

あと三日間しか生命が無いとしたら、その三日間が無限だ。

未来というのは、未来であつて、到来が予定されている一定の期間のことを言うのではない。

常に活性化していないといけない。

真の活性化のために、無限の未来が要るのだ。

未来が無かつたり、有限だつたりでは、真の活性化など得られるわけがない。

無限の未来？

永遠の未来か。

これだけが、胸に突き刺さり、胸を苦しめる。

自由は、永遠の未来にのみ成り立つ。

自由と、永遠の未来とは、ほとんど同じものだ。

体温が冷えたままで、上手なことを考えて、いくらこなしていても、そんなことは何にもならない。

誰にとつても、自分は、欲望に用事があつて、真理に用事があるのではないのだ。

欲望への手がかりになる真理なら、大至急掴まねばならないが、欲望に何の寄与もしない真理風情の絶望話なんて、聞いていたってしょうがない。

なぜ、無限の未来と言わず、永遠の未来と言わなくてはならないのか、理由がうまく見つからない。

ただ、無限の未来というと、何かがしんどい。

永遠の未来というのが、一番しつくりくるので、そのままにしておこう。

不老不死なんて、誰も欲しくないだろうし、欲しいのは不老不死ではなくて永遠の未来なのだ。

不老不死なんかもうぐらいなら、三日間でいいから、永遠の未来がほしい。

幸いなことに、未来は無限であり、未来はもともと永遠だ。

未来というのを、予定された時間として、時計で測ろうとするからいけない。

未来は、いかなる分量であれ、未来であるがゆえに永遠だ。

三日間とか、三か月間とか、三年間とか、時間がわかつていないと計画は立てられない。

一方で、永遠の未来がなければ、計画を立てる動機がない。

このことは、理屈では意味不明だが、計画を立てようと取り掛かり、紙にペンを下したとき、意味がわかつてくる。

人は永遠の未来に向けて計画を立てるのだ。

有限を唱える理屈者へ。あなたの理屈に口答えするつもりはないが、あなたは数学的な感覚が甘い。

有限説を唱えていたらよいが、あなたのその理屈こそ、あなたが死ぬとき

に合わせて一緒に消えていってしまうだろう。

やがてはそうして消えてしまうものを、何を頑張つて有限説の理屈を唱えているのか？

(な？)

有限の未来に向けては、こうして「計画が立てられない」だろ

う?)

誰でも計画を立てたらいい。計画は善のものだ。

欲望のことは、考えてもよいけれど、どうせ永遠の未来と自由は同一のものだし、自由は必ず欲望に向かうから、あまりむつかしく考え込まなくていい。

考えなくても、人間はそれぞれに、自己の欲望を知っている。

計画書は、その冒頭から、怒りに満ちたものになるだろう。

怒りの書であり、真実の書だ。

そこに書きこまれたことこそが、自己の全てを決定する。

そのとき、完全な爆発を得る怒りは、体内に残らず、体内に一切のむかつきを与えない。

もう、むかつく用事は全て済んだからだ。

輝ける怒りがこれまでの妄想を淡々と引きちぎっていくのみだろう。

これまで、あまりにたくさん、大切でもないものを、大切にさせられてきた。

真実の書へ筆を下す瞬間、そんなものは何も大切ではなかった、ということに気づく。

自己の全てを決定する、その計画書へ、筆を下すとき、自分にウソはつけないものだ。

そのとき、自分がこれまで、どれだけ自分にウソをやってきたか、いやがおうにも気づくものだ。

時計とカレンダーから、有限の未来という理屈を唱える者も、自己の全てを決定する計画書に書きこむとき、急に身をひるがえして、「永遠の未来」と書きこむものだ。

未来が有限であつてたまるかよ、と、急に本当のことを言いだしてしまう。永遠の未来だけが、物語を持ちうる。

物語とは、シナリオのことではない。物語は物語としか言えない。

物語は、きらつきらのものだ。

磨いてもいないのに、ときには野暮ったくもあるのに、なぜか不意に、きらつきらに輝いている。

磨こうとしたりしたら途端に曇るだろう。

物語の無いところに、長々と居座っても、何にもならない。

物語に関わらない人と、長々と親交を深めても、やはり何にもならない。

そういった、まるで大切でないことを、これまで大切にさせられすぎてき

たのだ。

今さら、そんなものはもう、引きちぎってしまえばいい。

障子紙を破るように。

そんなことには何の感興も起こらない。ただの、既に決定済みの、破却事項だ。

怒りの書、真実の書が、それを携える人を、はっきり目覚めさせてしまう。

だから誰だつて計画を立てたらいい。

計画を立てたら、自由になれるし、落ち着ける。

ただし、あくまで、計画書は怒りの書であり、真実の書でなくてはならない。

そこに書かれたことこそが、自己の全てを決定するのだから。

計画を、立てないということも、人の好き勝手であるには違いない。

そうして、怒りの書を持たない人は、目が覚めないのです、まるで大切でないことを大切にしているだろう。

そうした人は、落ち着かず、不自由なまま、駆り立てられて、自分を慰める手がかりを日夜探し求め続ける。

そして、積み重ねた手がかりは、のちに全て裏切り、突然全てが空虚を自白するだろう。

なんという、とんでもない裏切りだ。

そうしたところに起こる、終末的な、救いがたい哀愁を、文学的なモチーフに組み込む手法がある。

割とよくある手法だけれど、そんなもの、まっぴらごめんこうむりたくて切実だ。

よりにもよって、しくじった人の成れの果てまでを、観察し続けるために生きるとか、それを発表するために生きるとか、そんな悲惨極まることは、まっぴらごめんだ。

怒りの書に書きこんだとおりに、自分は何にでもなれるのに、わざわざそんな悲惨な自分を選択することの気がしれない。

怒りの書は、これまで思いがけなかったことを、何の感興もなく決断させる。大切だと思わされてきたものを、あっさり引きちぎって破断する。

色んなことに、心理的な抵抗はつきものだ。

が、何だその、心理的な抵抗って。

ヘソで茶を沸かす類だ。

心理的な抵抗などというものには、屈服する理由がまるでないし、向き

合って乗り越えるような値打ちもまったくない。

心理的なものなど、自分の欲望とは関係が無いし、自分の真実でも何でも無いのに。

もし、心理的に生きたら、夢を持って生きるなんて、イヤなことづくめに決まっている。

怒りの書には、本当の決断が書きこまれねばならない。

それが自己の全てを決定する書なのだから。

自分が強くなる必要はまったくない。

怒りの書が、強すぎるので、自分はそれを受け止めるようにあればいいだけだ。

怒りの書を、受け止めない人間を、「夢見がちでだけない人間」という。

人は現実的でないといけない。

人間は、自分の気持ちなどで、自己を決定することはできない。

自己の全てを決定するのは怒りの書だ。

だから計画を立てたらいい。

怒りの書は、物語に関係のないものを、バツサリ切り捨ててくれるだろう。心理的に生きる時、しんどくてしょうがないのは、関係のないものを関係があるふうに、常に誤解し続けてしまうからだ。

怒りの書に書かれていないものは自己に関係がない。

ほんわかした日常のエンカウントシーンなど、自己に関係ないのだ。

自己に関係のないものへ、心理的になる必要はないし、かといってことさらに冷たい態度になる必要もない。

怒りの書には、関係のない人に冷たくしよう、なんて計画は書きこまれない。

旅に出るのもいいかもしれない。

旅は、ただ旅だというだけで愛せるからいい。

旅をしたい、という欲望は、きつとほとんどの人にある。

旅行を勧めているわけではない。旅行も楽しいけれども。

旅というのは、ほとんど、目的地を持った時点で、もう旅ではなくなるだろう。

旅は、目的地なし、目的地が目的でなしだ。

自由と放埒の旅だ。

永遠の未来があるから、人は旅に出ることができる。

旅先にて。

怒りの書の冒頭にはこう書かれる。

「あんなものは換金だ」

もういいかげんにそうしようではないか。

本当にはまるで大切でないものを。

自分をだめにするだけと、とつくにわかりきっているものを。

意外な展開についていけないだけの、まるで老人の脳を晒しているだけのことではないか。

老人の脳に決して付き合うな。老人の脳は、思い入れという重病を患っている。

自由および欲望とは何か？

それは、単純に、若くピチピチした脳のことだ。それがあつよ、というだけのことだ。

まるで大切でもないものを、大切なふうに思い込まされてきた。

それは、未来が有限のものとして取り扱われてきたからだ。

永遠の未来、となった途端、若くピチピチした、思い入れを持たない怒りの脳が、全てを淡々と吹き飛ばしてしまうだろう。

それが自由および欲望だ。

怒りの書には、何でもかんでも書きこまれねばならない。

それが自己の全てを決定するから。

自己の全ては、永遠に、未来に続いていく。

だから、本当に大切なことに向けてしか、書けないのだ。

まるで大切でもないものに、永遠に付き合う自己にさせられては、たまったものではない。

だから怒りの書には、本当に大切なもの、自分の欲望についてしか書けない。

永遠の未来というと、「永遠に未来があるから、まあいいか」となりそう

なものだ。

けれども実際は逆だ。

逆に、未来はどうせ有限だからと、タカをくくっているから、人はでたらめに生きてしまう。

永遠の未来に向けてしか、人はちゃんと生きようとしなないものだ。

永遠の未来に向けてなら、心理的などうこうに主権を与えるような愚かな

ことは誰もやらない。

心理的なものなど、片腹痛いことで、「永遠の未来と言っているだろ」、  
永遠の未来の前に心理的なものなど通用しない。

冒頭に書かれる、

「あんなものは換金だ」

そこに言う「あんなもの」は人それぞれにあるだろう。

なぜそんなものを、大切にさせられてきたのか。まるで大切ではないのに。

永遠に大切にするつもりでなければ、それは結局大切ではないのだ。

自由と放埒の旅はどうか。

自由と放埒の旅は、「あんなもの」呼ばわりされない。

自由と放埒の旅は、永遠の未来に向かって歩いていく。

自由と放埒の旅は、人の歩を進めさせる。

物語への欲望に向けて、人の歩を進めさせる。

普段、欲望はまったく抑圧されているわけだ。

永遠の未来を生きねばならないとわかったとき、人は抑圧から解放され  
るだろう。

「永遠の未来／了」